

〈翻 訳〉

ドイツ高等学校・上構学校教則大綱

(1924. 3. 13)

プロイセン文部省 編
小 峰 総 一 郎 訳

目 次

- 一 ドイツ高等学校・上構学校教則大綱について（実施省令）
……プロイセン文部大臣 ベリッツ
- 二 ドイツ高等学校・上構学校教則大綱

ま え が き

第一部 ド イ ツ 高 等 学 校

I 文 化 科

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

1. 第六年級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)地理

2. 第五年級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)歴史 (5)地理

3. 第四年級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)歴史 (5)地理

4. 第三年級下級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)歴史 (5)地理

5. 第三年級上級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)歴史 (5)地理

6. 第二年級下級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)歴史, 公民
(5)地理

7. 第二年級上級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語 (4)歴史 (5)地理

8. 第一年級

(1)福音派宗教 (2)カトリック派宗教 (3)ドイツ語, 哲学講読
(4)歴史, 公民 (5)地理

II 外 国 語

A. 第六年級から始まる第一外国語

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

1. 英語

(1)下級 (2)中級 (3)上級

2. フランス語

(1)下級 (2)中級 (3)上級

B. 第二外国語

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

1. フランス語

(1)第二年級下級 (2)第二年級上級 (3)第一年級下級・第一年級上級

2. 英語

(1)第二年級下級 (2)第二年級上級 (3)第一年級下級 (4)第一年級上級

3. ラテン語

(一) 目標および方法

(二) 教育課題

(1)第二年級下級 (2)第二年級上級 (3)第一年級下級・第一年級上級

Ⅲ 数 学, 自 然 科 学

1. 数学

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

(1)第六年級 (2)第五年級 (3)第四年級 (4)第三年級下級 (5)第三年級上級 (6)第二年級下級 (7)第二年級上級 (8)第一年級下級・第一年級上級

2. 物理

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

(1)第三年級下級 (2)第三年級上級 (3)第二年級下級 (4)第二年級上級 (5)第一年級下級・第一年級上級

3. 化学

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

(1)第二年級下級 (2)第二年級上級 (3)第一年級下級・第一年級上級

4. 博物

一 序言〔目標および方法〕

二 教育課題

(1)第六年級 (2)第五年級 (3)第四年級 (4)第三年級下級 (5)第三年級上級 (6)第二年級下級 (7)第二年級上級 (8)第一年級下級・第一年級上級

Ⅳ 音 楽, 図 画, 工 作

1. 音楽

2. 図画

一 一般的教育目標

二 教育課題

(1)第六年級～第四年級 (2)第三年級下級～第二年級下級 (3)第二年級上級～第一年級上級

3. 工作, 製図

一 一般的教育課題

二 個別的教育課題

a. 木工, 紙細工, 金工, 製図

(1)第六年級 (2)第五年級 (3)第四年級 (4)第三年級下級 (5)第三年級上級 (6)第二年級下級 (7)第二年級上級～第一年級上級

b. 裁縫, デザイン

4. 体育

第二部 上 構 学 校

一 序言 [目標および方法]

二 教育課題

1. 宗教

2. ドイツ語

3. 歴史

4. 地理, 公民

5. 英語またはフランス語

6. 数学

A. ドイツ高等学校型上構学校

B. 高等実科学校型上構学校

(1)第三年級下級 (2)第三年級上級 (3)第二年級下級

(4)第二年級上級 (5)第一年級下級・第一年級上級

7. 物理

8. 化学

9. 博物

(1)第三年級下級 (2)第三年級上級 (3)第二年級下級～第一年級上級

第三部 時 間 数

1. 基本型ドイツ高等学校 [9年制] 時間配当

2. ドイツ高等学校型上構学校 [6年制] 時間配当

3. 高等実科学校型上構学校 [6年制] 時間配当

一 ドイツ高等学校・上構学校教則大綱について（実施省令）

本年2月12日のプロイセン総理大臣通達のとおり、プロイセン内閣は「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」を承認した。したがって、今後本教則大綱が最終的に発効することになる。

本官は各地方学務局に3部、本教則大綱のコピーを送付する。各高等学校は文部公報第7号付録によって本教則大綱を入手できるはずである。本教則大綱の文部省版は、近くヴァイドマン書店（ベルリン西南地区68区、ツィンマー通り94番地）から発行されることになっている。

本教則大綱の序言1で求められている各学校用の独自の学科課程は、今後すみやかに学科会議、クラス会議の助言にもとづいて作成し、地方学務局の再検査を受けなくてはならない。1925年10月1日に行われる予定の教則大綱の認可状況についての報告には、付録として特にすぐれた学科課程を数例添付したいと思っている。

選択科目に関しては本官と大蔵大臣との間で、当面器楽を問題にしようのはすでに器楽設備が整っているところ、または国庫支出金がなくとも器楽を開設できる学校に限定するとの合意ができています。この器楽教育を音楽の標準時間数で行なうことが見込めず、器楽教育に超過費用がかかる場合にはそれは当該父母の負担とする。もし個人的努力の範囲では足りない場合、学校後援者の協力や生徒たちの行なう各種催物でこれのための十分な資金を調達することも可能である。生徒の任意のクラブでの器楽を育成することは音楽教師の特別の役割である。国家財政が困窮しているという状況のもと、音楽ならびに他の教育課題を進めるに際しては、以前にも増して学校の自助努力と広範な人々の支援とを当てにしなくてはならない。工作もそのひとつである。残念ながら本官がこれのために支出しようる国費はきわめて僅かにしかすぎない。1921年4月9日付本官省令（UⅢA 566 UⅢ, UⅡ, UⅡW）に言う各学校の目的に適合する工作教育が経済的に展開されるならば、そして何よりも、勤労生活者の間に労働学校の精神の中にあるこの自助という考え方への理解を一層目覚めさせ、新校種ドイツ高等学校、上構学校の父母、支援者の間に活動的課業こそこれらの学校の固有の教育課題にとってまさに最高の価値をもつものだという認識を浸透さ

せることに成功するならば、必要な財源は多面的に生み出されることであろう。

上記省令に言う活動的課業として、本官はすでに1921年6月30日の省令(UⅢA 1306)で学校園での労働がこれに当たると言った。園芸教育、農業教育はドイツ高等学校およびこれに対応する上構学校の独自の教育理念にとって意義深いものであり、またこの種の活動は導入がきわめて容易でかつ経済的に展開することができるものであるから、本官はたとえ国庫からの支出がなくともこの種の教育を多くの学校に導入することが可能だと信じるものである。

ベルリン、1924年3月13日

プロイセン文部大臣 ベリッツ

各地方学務局 殿

省令 UIIN 50 UIII. 1号

二 ドイツ高等学校・上構学校教則大綱

（1924. 3. 13）

まえがき

「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」は従来の学科課程でいうような意味での教育課題を述べてはいない——ただし数学は除く——。本教則大綱が述べているのは、新学校の教育理想を実現するための理念的要求、つまり各学校に義務付けられている教則を作成するに当たって、教材選択ならびにそれを教育活動に移す方法としてどのようなものを求めたらよいかという理念的目標なのである。その場合注意する必要があるのは、第一に、序言で述べられているような諸方策によって教材の過重採用や極端な教育課題の設定がないようにするということ、第二に、新学校にとってどれほど望ましいものであったにせよ、教科書や教材を採用するに当たっては今日の財政窮状による限界があるという点である。

概 要

第一部 ドイツ高等学校

I 文化科

II 外国語

III 数学, 自然科学

IV 音楽, 図画, 工作

第二部 上 構 学 校

第三部 時 間 数

第一部 ドイツ高等学校

I 文化科

一 序言 [目標および方法]

1922年2月18日の、基本型〔9年制〕ドイツ高等学校ならびに〔6年制〕上構学校に関するプロイセン文部大臣覚え書き（省令U II 11 II）の中で述べられた教育理念を実行するために、ドイツ高等学校およびこれに対応する上構学校は次のようなやり方で文化科の諸科目を統一体に作り上げるものとする。つまり、いずれのクラスも一定の文化科の課題を設定し、これを全教科のなかで協同学習によって達成してゆくというようにである。これを行なうにあたって第六、第五年級は子ども期の終わりの時期（感受性豊かな体験の段階）、第四～第二年級下級は少年期（直観的認識の段階）、第二年級上級～第一年級上級は成熟期（知的世界に分け入っていく段階）として、それぞれ若者の心理精神的発達段階に対応して各段階の教育、教授はこれを相互にはっきりと区別することが必要である。また女子教育という特別の要請にも考慮がなされなければならない。

1. [各校独自の学科課程]

ドイツ的生活が個々の地方によって多種多様であるのに対応して、ドイツ高等学校の全体教授は——とり分け下級、上級にあっては——、完全な移動の自由のもとに多様な形態の文化力に適合しなければならない。それゆえ各校ごとの独自の学科課程は、当局の学科課程の中に盛られた事例に基づき他校よりも一層その地方の特別な事情を考慮して作成しなければならない。どのような教育課題を取り出せば成功の見込みが得られるものか、教育課題の選定にあたって教師集団は、厳しい自己反省の上にそれを行なう必要があるだろう。次いで題材を個々の授業科目に割り当てる作業はクラス会議の中で行なうものとし、全体教授の要求に応じて題材検討の日程もここで決めるものとする。この全体教授は、クラスの教師が学習協

同体と力をあわせたときにのみ成功を収めることができるであろう。かかる視点から時間割は自由とし、また、哲学講読ないし公民の授業はいずれの専科教員にも任せるものとする。このことは美術鑑賞、音楽史ならびに他の素材的領域にも当然当てはまることである。同様に、文化科諸科目の学習協同体を、事情によっては多種多様な科目的関心に基づいて編成してもよい。しかし、特定の教育課題をある科目に割り当てたにしても、その他の科目の側でも全力を上げてこの学習課題に迫ってゆかなくてはならぬという責任がなくなるわけではない。このことは特に、諸科目全体の教育課題を公民、哲学、芸術方面に設定する場合に言えることである。ある学年の学科課程に割り当てられた教育課題が、それ以前の段階で既にそれに向けた予備学習がされているというように編成されてよいし、他方後の学年の教育課題がこれの深化発展となるように編成されてよいということもまた自明のことである。

2. [作業教育]

さらに、各校独自の学科課程を作成するに際しては、内容選択に関するこうした視点の他に、まさにこの学校のどの題材に作業教育原理を適用したらよいかという問題がある。文化科の授業は他の授業よりもはるかに、生徒の自主的活動を通して彼らにすでに備わった素質を明瞭な意識にまで高めることができるのであるから、実り豊かな作業教育のための前提条件は最下級の段階からすでに十分にあるといってよい。だから、いかなる段階であろうとも、時間割に過剰な教材を盛り込んで生徒の静かで妨げのない展開のなかで営まれるこの作業教育を制限するようなことがあってはならない。作業に真剣に取り組むことによって、全く感情的な授業となる危険も避けられるであろう。

3. [外国語とドイツ文化]

文化科の全体教授では、外国文化を全教科の中ならびに外国語教育と関連させて十分に考慮することが必要であり——ここにおいてドイツ的なも

の特性は、己れを外国文化の対極にあるものと認識するはずである——、他方外国語教育の側でも同様に、これに対応するドイツ的生活の文化形態と関係づけることが必要である。したがって全語学教育が、ドイツ語教育の中で行なわれている言語現象の理解の仕方ならびにそこで使われている用語法を採用しなくてはならないだろう。このことに関して未だ一般的規定がない場合、統一的表現法は個々の学校に任せるのがよいであろう。

4. [教育目標, 教育方法]

1901年5月29日および1908年8月18日の学科課程[「高等女学校制度の新秩序」], さらに1917年5月18日の「福音派宗教教育学科課程」の各々に盛られた「教育目標ならびに教育方法注釈」は、同様の意味合いにおいてドイツ高等学校, 上構学校にも適用されるものとする。

二 教育課題

1. 第六年級

(1) 福音派宗教(3時間)

キリスト降臨に至るまでの聖書物語。内容的に関わるものとしては、ドイツ的な肖像画を適切な形で援用することも考えられる。選択するにふさわしい教材としては次のもの——聖書物語の中の箴言, 賛美歌, および歌詞メロディーとも定まった詩節——。できればこれらは教会行事と一致させることが望ましい。聖書物語につづいて教義問答書の授業。これは特に十戒ならびにルターの解説抜きで第二部[信仰]を扱うことによって、偉大な調和を教えるように配慮すること。我らの父と主の祈りの意味は、イエスの物語と関連づけること。また、クラスの郷土科的な学習テーマと有機的に結合することも必要である——例えば郷土の教会, その禮拜堂と聖像, 組織と祭式について——。それとともに、これは必ずしも必修とい

う訳ではないが、郷土やその地方の教会史の中から年齢に相応した説明や伝記を扱うとよい。さらに、ドイツの詩から事例を求めてもよい。

（2）カトリック派宗教（3時間）

基礎学校の教育計画と有機的に関連した高等学校の教育目標に照らして、第六年級の教育課題は基礎の深化、拡大とする。授業は祈りの生活に実際に導き入れること（学校ミサ）から始まる。授業には簡単な典礼の教育（教会、祭壇、典礼器具、ミサ服、ミサ）が付いているものとする。告解ならびに聖体拝領の授業の中で重要なものは繰り返し行なうこと。聖暦年と一致させること、祈りと聖歌（統一歌）とを心に刻みつけること。旧約聖書物語（但し聖話とあまり関係のない話は除く）を通して神とその特質、原罪とその帰結、救済の準備とを示すこと。教義問答書は第二信仰箇条〔イエス信仰〕から始め、神に対する義務〔父なる神においての信仰〕という最重要の部分、そしてその次の義務〔イエス・キリストにおいての信仰〕を扱うものとする。貞潔の教えを扱い貞潔の実行を教えながらキリスト者の生活を積極的に築いていくことは、第六年級から重視しなければならない。

郷土科的な全体教授に配慮し、子どもの年齢に即応して教会組織の教育ならびに身近な郷土のキリスト教的な生活についての最初の印象づけを行なうこと、そして教会が神の王国であるという本質を教えること。民衆生活の中の宗教的儀式ならびに記念祭は、郷土の重要な祝祭日と一致させること。聖堂やその記念物の集団見学は宗教芸術ならびにキリスト教生活に対する理解と愛を育てるものでなければならない。キリスト教の偉人、中でも古代教会の偉人（殉教者）の姿は、カトリック教の偉大さに狂熱できるようなものでなくてはならない。

（3）ドイツ語（6時間）

①音声学

朗読、報告、自由スピーチを織りまぜて音声学教養を訓練し、ドイツ語、

外国語、唱歌の共通の基礎を形成すること。音声を方言、話しことば、標準語と比較すること。このことは書き方の上で必要な正書法とも重なるものである。

②語論, 文章論

品詞, 語類を意味, 活用に即して教えること。名詞, 形容詞, 数詞, 動詞の基本的な区分。主要形容詞, 動詞の変化のうち最重要のもの。強変化, 弱変化の識別。日常生活や全体教授の中で生徒が観察したことに基づいて語彙を拡大していくこと。同系語を識別すること。その際特にルドルフ・ヒルデブラントの言う意味での語の内容と語感とに基づき, 方言に留意すること。

時制文とその主要素, 語順, アクセント。時制文の組み立てならびに文の内容を明示するものとしての句読法。

③朗読, 報告, 自由スピーチ

情感ゆたかな朗読, 物語り, 気取りのない詩の朗読を通して俗語ならびに標準語の練習。体験したこと, 観察したことの報告。他人が読んだり語ったりしたことについて述べること (あるいはこれを変形して述べること)。

④書き方練習

語論, 文章論にまで及ぶ書き方練習。文法と結合した正書法練習。その際, 大文字や小文字書き, 同音語や外国語といった特別細かい点にまで立ち及ぶ必要はない。書き取り——これは基本的には練習科目として行なわれる。授業で習ったことや体験したことを簡潔に書き記すこと (散文詩を解体して書くようなことは禁ずる)。自由表現。テーマ選択は生徒の自由。これを学級の中での書き取りとする (形は報告文, 書簡文, 他の人の物語り文として)。

正書法辞典を使用して誤りを避けるようにすること。

⑤文学作品

読み物，特にドイツ科に適合しかつ子どもの理解にもふさわしいと思えるもの。これは芸術的で価値の高い内容をもったものとし，クラスの全科目で用いることが望ましい。その際特に郷土の環境世界やそこでの生活様式の中から風俗と習慣，諸身分と彼らの仕事を扱ったもの。郷土やその地方の有名な人々の伝記。民話，創作童話，風物詩。動物記。子どものお話。これには最近の作品も含むものとする。適切な冒険談。家庭や身の回りの冗談話，シリアスな話。童謡やなぞなど。お伽話，物語詩。故郷の方言で書かれた小さな詩，物語，冗談。芸術的に価値ゆたかな広範囲にわたる歌や詩の学習。そして自分で選んだ詩を自主的に学習するよう援助すること。体験内容を歌に即して情感的に理解させること。特に歌いやすい民謡にあっては唱歌教育と結合させて人間の生，季節や祭り等の自然の営みを理解させること。これはつねに宗教，歴史，唱歌，体操，徒歩旅行，遊戯と結びつく必要がある。筋の明快なものを中心とした作品鑑賞——但し，以下の作者の読物や詩は除くものとする，つまりブッシュ，ハイ，リーバーマン，ライニク，リヒター，シュベックター，シュヴィント，シュピッツヴェーク，トマ——。これらにふさわしい絵を集めるよう援助すること。

⑥歴史物語

「郷土」とその周辺，およびその地方の物語や説話。できればこれは最も広い意味での過去の記念物（名前や街路，産業や建造物）と結びつけることが望ましい。最も美しいドイツの説話。

（4）地理（2時間）

郷土の風景ならびに地理的基本概念の発達をはかること。

天の運行，太陽の日運動，年運動，太陽の見かけの運動というレベルでの導入指導。磁石と時計。校庭や地域での実習。距離測定と目測。地図の基本の指導。これは実物，形状模型，地図記号と対比しながら行なうこと。

生徒が個々に観察するものに基づいて郷土科の基本を教えること。例えば地形の特徴，海や川，天候について。そして，これと関係する文明設備，例えば水路，灌漑，家屋や道路建設，農業や林業などを観察すること。

郷土についての知識をドイツ語や歴史の授業と関連づけること。故郷の歴史を町の姿や建造物を通して学ばせること。身近な故郷も広大な世界の一部なのであるということを理解させること。地図の基本的な習熟の上に立って、ドイツ地勢図の重要なところの教育。ヨーロッパの水平的広がり、垂直的広がりのおおよその理解。地球儀の初歩的導入と関連させて大洋と大陸の理解。

2. 第五年級

(1) 福音派宗教 (2時間)

使徒の生涯と物語を、かならずイエスの物語と関連づけて教えること。それはイエスの伝記、図像の個々の場面と結びつけて教えるものとする。箴言と教義問答書の聖句を聖書物語と関連づけて扱うこと。特に第三部「我らの父」をルターの解説抜きで扱うこと。第六年級におけると同じように賛美歌、詩論。他の文化科諸科と結びつけて古代ゲルマンの宗教と、それがドイツの民衆信仰の中でどのように生きているのかを教えること。キリスト教のドイツ国内での普及を、ドイツにとって重要な聖者、殉教者の生涯の中から具体例を引いて物語ること。意義豊かな聖徒物語。ルター並びに他の偉大なドイツ教会にとって重要な人物を、個別具体的にイメージできるように教えること。その際彼らのドイツ内外での伝道活動、並びに外国におけるドイツ福音派の人々の生活はどうだったかについても考慮すること。第六年級におけると同じように芸術鑑賞。

(2) カトリック派宗教 (2時間)

第六年級の聖書教育と結合して教義問答書の教育（第一信仰箇条「父なる神信仰」）は、信仰、神とその特性、キリスト、教会（寄進、制度、目的）、聖別、人間の完成を扱うこと。聖書の授業（新約聖書からキリストの復活まで）はできるだけ聖暦年で行なうこと。イエスの青年時代と人々の間での活動（奇跡や簡単なたとえ話）、受難と死とを、特に救済と神の王国の建

設という二大事業を解明しながら扱うこと。第六年級でと同じように祈りと聖歌を心に刻みつけること。教会を中心とした郷土科では、中世から現代にかけての史書や伝記のいくつかを扱うものとする。次いで教会の建造物の見学、教会の聖典用具類についての説明、身近な郷土についての理解へと展開してゆく。その他各種のやり方があるかも知れない。そうして身近な郷土のキリスト教についての理解がはかられる。ボニファティウス、ベネディクト派修道院。フランチェスコ。フランシスコ・ザビエルと伝道事業。若者の守護聖人——アロイシウス、スタニスワフ・コストカ、ヤン・ベルフマンス。郷土の聖人聖女。特に生徒の洗礼名にゆかりの守護聖人。

（3）ドイツ語

①音声学

音韻変化学理論の強化。つまり、音の弱化、母音の長音化、短縮、音の消失。文章論との関連で文の音声現象。文のアクセントと抑揚。あらゆる言葉で方言と標準語とを比較すること。

②語論，文章論

品詞を形と意味に即して学ぶこと。つまり格変化，名詞，形容詞，動詞，不変化詞。主要単語の語義グループ，つまり固有名詞，名詞，活動状態を表わすことば。

語綴，音綴。語根と派生語，複合語，簡単な前綴，後綴。語の合成，特に動詞の意味，種類，アクセント。語群を形，意味に即してまとめること。語彙の拡大，洗練を第六年級でと同じように観察や授業，読み物を通して行なうこと。

簡単な時制文の復唱と応用。時制文の主な構成要素。文の並べ方。主文章の基本結合。語順，抑揚に注意し，さらに句読法とも広く結びつけながらあらゆる文例を扱うこと。

③朗読，報告，自由スピーチ

第六年級でと同じように、方言や話し言葉に対して標準語を明瞭に教育するものとし、発音表に基づいて方言の特徴を明らかにしていくこと。

④書き方練習

第六年級でと同じように正書法と書き取り。それから句読法の練習。書き方練習を文法学習に展開していくこと。その際特に文章論と結びつけることが必要である。採用された題材をもとに簡単なものを書いてみることに。創作文を書くこと。特に子どもの童話、お伽話、あるいは他の読物を真似てみながら。そのほか第六年級でと同じように自由表現。

⑤文学作品

読物を取り上げるにあたっては第六年級におけると同様に、その学年の文化科の全体テーマと関連づけること。そうして郷土から祖国ドイツのものへと至ること。したがって題材は、郷土科的内容を決しておろそかにすることなく、ドイツの生活全体の中からこれを選ぶことが必要である。自然のいとなみとドイツ人の自然の受けとめ方。ドイツの神話。これには未だ民間信仰の中に生きている精霊信仰、魔女、悪魔、おおかみ男の如き話だとか、こびと、巨人、妖精説話などを含むものとする。昔の民間信仰の記念物。地方の様々な生活の中で展開されるドイツ的生活の諸相。外国におけるドイツ人の生活。ドイツの経済、ドイツの労働の過去と現在。法慣行。他の文化科とも関連して祭りの慣行、民衆生活の中の笑い。民謡、ことわざ、なぞなぞ。若者の習わし、青少年演劇。第六年級におけると同じやり方で詩、歌の暗誦。歴史、地理、遠足と緊密に結びつけてドイツの年代記から選りすぐった題材。適当と思われる造形芸術作品の利用をいつ、どこでも。特にドイツの町や村、山や教会、市場や通りを描いた絵画、またドイツの全文化領域から選び出した作品はつとめて用いるように。

(4) 歴史 (2時間)

ドイツ語と同様に「郷土から祖国に至る」ことを全体課題とする。祖国の伝説や物語の中から取り出された文化史、実態史のように出来上がった

ものを扱うときは、教師が典型的な特徴を語ったり文化科での実物教授を利用して、できるだけ生徒に生き生きと身近に感じさせるようにすること。ゲルマン古代の生活の具体的な姿。ローマ帝国との戦争。民族大移動をしていた英雄時代。これは説話劇の形でも行なう。そのときはドイツ語の授業と分業で行なうのがよい。ゲルマン人の信仰、およびキリスト教の侵入。これは宗教科と関連させること。中世初期の大皇帝たち。騎士文化の盛期。市民生活、農民の実情。三十年戦争。フリードリヒ大王。解放戦争。ドイツ帝国の誕生。世界大戦と現在。上記の内容と密接に結合し、併せて地理とも関連させ、できるだけその地方の実情を折り込みながら生徒の年齢段階にふさわしいやり方で経済、公民の基礎を教えること。歴史の授業は公共の制度とその行政、共同体、国家についての生徒の最初の理解を与えるものであるから、人間の共同社会活動ならびに人間の生活協同体の基本的事実を注意深く教えていくものとする。

（5）地理（2時間）

ドイツ諸州の地理。ドイツ、ならびにゲルマン人から成る中欧の地図上のイメージをしっかりと形成すること。その際地下資源、地名、地域の形状と結びつけて土地構造、経済生活・交通関係・人口密度の基本的特徴ならびに入植の基本的形態を理解させるものとする。気象現象を扱う場合には、土地の状態との関係ならびに人間生活、動植物の生息状況を取り上げること。鉱物学の初歩ならびにごく簡単な地質学の基本概念を、一定の地理学上の主題と密接に結びつけて扱うこと。距離、面積、高度についての若干の比較数値的イメージを形成すること。ドイツの主な邦ならびにプロイセンの諸州。文化科の全体教授と関連させてドイツの風土、種族、地方をそれそのものとして、あるいは比較対照させながら扱うこと。

一年間の生徒の観察活動を十分に尊重して、簡単な数量的地理概念を拡大させてゆくこと。例えば夜空の運動、つまり北極星、若干の星座、月、月食など。生徒のスケッチを十分に活用して地図上に地形の様子を図解すること。広域の方眼図にその地方の地理上の重要点を表示していくこと。

3. 第四年級

(1) 福音派宗教 (2時間)

他の文化科諸科目と分業で、古代民族の宗教のうち幾つかを（エジプト，バビロニア，ペルシア）。歴史の授業と関連させてギリシア人，ローマ人の宗教生活を描いた絵画。この学年の中心課題は旧約宗教への導入である。また，基礎学校段階での預言者たちのところまでの補足，深化も行なうものとする。価値が高く生徒の年齢段階にもふさわしい預言者文学，修養文学の中の幾編かの講読。預言者，賛美歌，智恵文学にゆかりの重要な土地のイメージを刻みこむこと。聖書講読と有機的に結合させて，ルターの解説付きで第一信仰箇条〔父なる神信仰〕と，〔教義問答書〕第一部〔十戒〕を教えること。キリスト教の信仰，倫理，芸術とり分けドイツの賛美歌の中に旧約聖書の来世がどのように表れているかを教えること。折にふれてこのような賛美歌を空で歌えるようにすること。

(2) カトリック派宗教 (2時間)

主の復活から使徒の死までの聖書物語。中でも特に必要なものは次のものである——復活した主イエス・キリストの活動，聖霊降臨日の意味，大使徒たちの生涯——。第四年級の聖書物語の補足，深化をする中で神格教師イエスのことを（山上の垂訓，寓話を通して）教えること。教義問答書教育（第三信仰箇条〔聖霊信仰〕）では恩寵を得る道について掘り下げて教えること。特に悔い改め，聖体秘蹟，祈りについては必ず。これと関連して典礼についての基本的な教育（教会暦，秘蹟授与，儀式，聖ミサ，日曜説教典）を。その他の祈り，聖歌集。

ア. 中級段階の教会史教育についての一般的序言

教会の実態史，文化史は，教会という機構を生き生きと理解させ，もって今日の教会の負っている偉大な任務を自覚させるという課題をもつものである。また，上級での教会史教育の準備のために，最重要の事実ならび

に各時代の重要な年号はしっかりと記憶させなくてはならない。

イ. 第四年級の教会史

第四年級の教会史教育の教材として，キリスト教古代の教会の実態史，文化史を扱うこと。キリスト教信仰については，ギリシア・ローマの神信仰，イスラエルならびに近隣諸民族の宗教状況についての大まかな一般史に即した説明を通してその世界史的意義を明らかにしていくこと。単独に扱うものとしては以下のもの——ペテロ，初期の教会の長。使徒たちの異邦人伝道活動。ユダヤ人に下った神の裁き。キリスト教徒への迫害者たち。カタコンベ。コンスタンティヌス大帝とキリスト教公認。教父たち。初期の隠修士たちの生涯，修道院生活——。説明のあらゆるところでカトリック教会の特色と本質を明らかにするものとする。

（3）ドイツ語（5時間）

①音声学

朗読，報告，自由スピーチと有機的に関連させ発音表を利用して音声学の練習。発音記号と綴りとを一覧にして両者の関係を理解させること。

②語論，文章論

品詞のまとめと補足。時制の表現。固有名詞の活用と日常外国語。強変化，弱変化のちがい，主要語の性によるちがい，重要な変化形。これらは方言によるちがいに注意してすべて扱うものとする。語彙拡大の練習を継続すること。

従属複合文。副文の理論——結合，意味，形，位置価値，配列。並列節から従属節を作ること。一定の語構成の中での文の作りかえ，一定の文の中での語構成の作りかえ。従属接続詞の由来と性格。一定の文関係を表現する各種の表現可能性を練習すること。それも文体の視点から行なうこと。句読法と文構造との内的関連。

③朗読，報告，自由スピーチ

これまでと同様であるが、特に力を入れて明瞭な発声と明瞭な意味内容、リズムのある表現につとめること。その際つねに発音表を使用すること。伝達や報告とともに簡単な説明——折にふれて。祝祭日や遠足のときにも——。自作あるいは暗記したものを簡単に発表すること。

④書き方練習

時折、正書法と書き取り。時制文の応用練習。文法練習。特に従属文の理解を促すこと。第五年級でと同様に全教科の中で短い記録をとること。簡単な作文（年間約3編）。題材は授業の中で話されたこと、そして特に生徒が身近に観察したこと——身近な環境世界の理解が促進されなくてはならない——から採ること。これまでの内容を簡単に綴ること。従前どおり作文作法。ときどき宿題作文。

⑤文学作品

第六年級、第五年級でのテーマ内容を継続・発展させる意味で、読物は当該学年の文化科のテーマと一致させて採用するものとする。つまり「古典古代」。ギリシア、ローマ世界の範囲での説話。ヘラス〔ギリシア〕とローマを文化科に取り入れるときは、つとめて古代詩人、作家の芸術的にすぐれた翻訳の中から適切な章節を引証しなくてはならない。特に宗教教育と分業する場合、ときどき他の古代民族の文学作品の中からサンプルを選んでみる。さらに古典古代の全分野についての学問的著作の中から簡単なサンプルを選んでみる。

また古代学や芸術鑑賞も、ドイツの基盤の上に残っているギリシア・ローマ文化を知らしめ、ドイツの芸術、建築の中に古代文化の傾向が残存していることを示すものであるから、歴史、地理と分業して文化科の課題として尊重する必要がある。第六年級、第五年級におけると同様に、詩と歌。また今までと同様に詩の暗誦。

宿題の課外読物はいっそう重要となっているので、これからは授業の中で準備を始め、指導するものとする。

⑥詩論

第六年級，第五年級のドイツ語で，唱歌と関連して生徒にメロディー，リズム，韻律へのしぜんな喜びが育った後，第四年級からのドイツ語では芸術形式への理解を育てるものとする。ただし，これが詩の内容を解明し芸術的な喜びを助けるという限りにおいてであるが。いかなる場合においても，個々の芸術作品から詩作のテクニクがひとり歩きしてとらえられてはならない。さしあたっては詩句，詩連，韻の最も重要なものだけを扱うものとする。音色，メロディー，リズムの感覚を育てること。これは散文だとか読み，朗読とも関わって教えることが必要である。

（4）歴史（3時間）

ア. 中級段階のための序言

中級段階（第四年級から第二年級下級まで）の歴史教育では，実態史，文化史を通してドイツの歴史の具体的な理解，古代史の中にドイツ史が成立してくる諸条件，ドイツ史の世界史に対する関係——を理解させることが必要である。それとともに中級の歴史教育は，歴史事実についての確実な知識を刻みこみ，もって上級段階（第二年級上級から第一年級上級まで）の歴史教育の準備をなすという課題ももっている。

イ. 第四年級の目標と内容

第四年級での学年の全体テーマ「古典古代」では，何よりもまず古代から生まれた力が今日なおドイツ文化の中に息づいていることを示すことに努力するものとする。それゆえ，政治史がもし公民教育に有効に機能しない場合は文化科的な考察に道を譲らなくてはならない。第五年級で同じようにそれ自体で完結した実態史，文化史。ドイツ語と関連させて古典古代の説話。ギリシア初期，ギリシア中期の具象画——トロイとミケーネ，クレタと古代スパルタ，オリンピアとデルポイ。ギリシア解放戦争時代の英雄たちの姿。ペリクレス時代のアテネについての簡単な解説。詳細に述べる必要のあるものは，アレクサンダー大王の業績，ヘレニズム時代の文化，さらには当時の世界の日常生活。これらは宗教，地理と関連させて。またペルシア戦争を扱う際にはオリエント文化にも幾つか触れること。

ローマ史から教材を選び出すときも、さきと同様の視点に基づいて行なうものとする。初期の文化の様子を扱う際には、特に慎重に教材を選択すること。ポエニ戦争期の重要な人物。内乱の世紀。特に重要なローマの皇帝。対ゲルマン戦争。ドイツ語での読物教材との関連では、ローマ文化ならびにゲルマン人へのローマ文化の影響を理解するよう促すこと。第五年級でと同じように、扱われた素材を通して公民教育を行なうこと。その際特に、基本的な統治形態を描き出しながら政治・経済・文化諸潮流の相互作用、社会的諸闘争と革命、政治経済体制の相互消長、植民地化、平和的拡張、移動、民族混淆、を扱うこと。

(5) 地理 (2時間)

地中海地域と中近東をインド、東アジアを展望しながら扱うこと。授業ではこの地域の典型的な土地状況を、これと異なる気象条件下の中部ヨーロッパの土地状況と対比させながらできるだけ目に見えるように理解させること。これに関しては、諸民族の人種上、宗教上、歴史的運命上のちがいを教えること。この場合においても事実の一つ一つを正確かつ明瞭に認識把握していることが前提である。地理上の情景を簡単に説明するとき、つねに本学年の歴史やドイツ語の教材と関連させること。またこの地域の現在の姿を過去と比較して教えること。同様に、古代文化の成立を扱うときは、それに先行する独自の経済、芸術、宗教生活と関連させてこれを理解させること。また、この地域の現在の姿を過去と比較して教えること。その場合併存する文明、相互浸透する文明のこと、ならびに自然と文化との関係も教えるものとする。

初歩的な数量地学を発展させること。太陽系の実際の運動にまず入ること。地球を回る他の天体、地球の回転運動、地方時、同一時間帯。地球の公転軌道、動物分布、経緯度網。地学教材の範囲内での気象観察と関わって一日の平均温度、一年の平均温度。また等温線の広がり、地球の広範囲の地方で比較してみること。

4. 第三年級下級

（1）福音派宗教（2時間）

キリスト教初期から宗教改革の時代に至るキリスト教の実態史，文化史。第四年級の文化科教材と結合して，古代教会におけるイエスとキリスト教信仰の意義を明らかにすること。ルターの解説付きで〔教義問答書〕第二部〔信仰〕と第三部〔我らの父〕を教えること。新約聖書と教会史読本の中から資料解説。このとき，偉大な宗教的教師が現代ならびに青年に対してもっている意義を理解させること。文化史については文化科の全体教授との関連で，キリスト教信仰がそれぞれの時代ならびに生活領域に果たした役割を明示すること。この学年の全体テーマに対応させて，ドイツの教会史を前面に出すこと。教皇制度。アウグスチヌスと彼が中世に対してもっている意義。修道院史の中から特徴的な絵図を用い，各時代における修道院の役割を明らかにすること。ボニファチウスとフランク王国の教会。歴史と関係して王権と教皇との闘い，十字軍。ドイツ語，図画と関連して中世の詩や造形芸術の中のキリスト教。フランシスコとイノケンティウス三世。宗教改革運動前史。ルター，ツヴィングリ，カルヴァンの生涯に即して宗教改革。ルターの〔ドイツ語訳〕聖書，福音派賛美歌集，信条書とり分け小教義問答書の成立。反宗教改革の様子。この時代の高名な詩人たちが，信仰心ならびに宗教生活の表現として描いた重要な賛美歌の朗読と学習。

（2）カトリック派宗教（2時間）

聖書史と結びつけて旧約聖書の掘り下げた研究。文化史，宗教史についての問題（前史，聖書，科学，一神教）。宗教上の指導的人々（アブラハム，モーゼ，預言者たち）。イエスの導きの書としての旧約聖書。（総括的説明の中で偶像，預言，およびユダヤ人のメシア願望を）。旧約聖書の中から選り出した章節。聖書学，聖書地理。教義問答書の授業は，つねに思春期の始まりという生徒の心の状態に配慮して第二信仰箇条〔子なるイエス・キリスト信仰〕を扱うこと。講読や礼拝行を通して，信仰の諸々の危機を強調していくことが必要である。現代の迷信。日曜聖別。学校と家庭との関

係。権威と自由。よい模範と誘惑。純潔。所有の意味と保護。真実への愛と尊敬。この授業では罪とその起源，ならびにキリスト教の完全性理想とを取り上げること。礼拝の祈りと典礼歌とを心に刻むこと。

文化科の全体教授と結合して，ゲルマン諸民族にとってのカトリック教会の意義，とり分けドイツ中世における意義を明らかにすること。自由に使える時間があれば，ヨーロッパの民族大移動が教会の拡大に果した意義にも触れるとよい。ドイツ国内におけるベネディクト派修道会。ドイツの使徒ボニファチウス。カール大帝。ローマと東方教会との分離。アラビアの民族移動と，キリスト教に対するイスラムの脅威。十字軍が教会と文化に果した役割。教会制度の中における托鉢修道会。教会と学校，教会と中世芸術，教会と生活活動については，教会がこの時代の全体生活に全面的に影響を及ぼしていたということを浮き彫りにするものとする。教会分裂のきざし。ルターと教会分裂。教会分裂を扱うときは，カトリック教会とプロテスタンティズムの基本形態のちがいを深く理解させることが必要である。ドイツならびに北方諸国における宗教改革の展開。トリエント宗務会議とそこでの教会革新の意義（カール・ボロメウス）。イエズス会。地理上の発見からフランシスコ・ザビエルの死までの教会の伝道活動。隣人愛の使徒ビンツェンツ・フォン・パウル。

(3) ドイツ語 (5時間)

①音声学

外国語，唱歌の授業との分業で音声学を扱うこと。音声を方言，話し言葉，標準語と比較すること。身についてしまった不正確な言葉を修正するための標準語訓練。インド＝ヨーロッパ諸語についての概要。言語の歴史からみた言葉の変化。特にドイツ語の変化——方言の多様性にも注意して——，および外国語の変化。

②語論，文章論

語論では，語の生成と変化という歴史的方面への視点のもとに，第四年級の教授目標を継続する。借用語，外国語については，文化科，歴史と関

連させてギリシア、ローマ文化の言語への影響について。キリスト教ならびに教会用語。現代語の中の古代語、古代形。言葉遣いの変動。意味の似かよった言葉を中心に、内容、語感、日常の流布状況などに沿って掘り下げて扱うこと。死滅しつつある語彙、新しい語彙。新造語。語源俗解。第四年級におけると同様に語彙の拡大訓練を、特に外国語を使わないで行なうこと。

多種類の副文。代名詞の使用法を洗練させること。時制文の各形式、時制文の構成法則。語順、文の抑揚、重要語の順位。句読法。

③朗読、報告、自由スピーチ

明瞭な音声、内容にふさわしい読み、そして自由スピーチの不断の練習。ちょっとした実演。

④書き方練習

文章論のための練習。第四年級でと同じように全教科で記録をとること。第四年級でと同じように観察文をつくること。口頭練習で準備して報告、説明、描写、さらに、他の授業科目の中の題材も応用して。題材を自由に選択するときはファンタジー豊かな作文を書く刺激になるようなものを。時々テーマを指定したり読物の一部を応用したりして練習させること。年間約10編の作文。そのうち4編は家庭宿題とする。教室内で仕上げる作文。これは2時間以内に。

⑤文学作品

民族移動の一連の説話、ディートリヒ説話、ニーベルンゲンの歌、ヒルデとグードルーン、ランゴバルト人、フランケン人、バンダル人の説話。他の文化科諸科と分業して、文学的に価値ある作品に基づいて、古代ゲルマン文化を概観すること。エッダの中から選んだ一部分。ドイツの民衆本。学級の全体教授、特に歴史と関係づけて芸術的な作品を。文化史的な短篇小説、物語。他方、生徒の段階に応じて古今の詩人の芸術的作品を。家庭読物も利用すること。歴史的バラードの代表的なもの。風景叙情詩。故郷の方言で書かれた詩。時にはまた、別の方言で書かれた詩。適切に選び出

された詩の習得。自由に選択した詩の習得もすすめること。時には昔の劇作の一部を（滑稽譚，クリスマス劇，宗教劇）。

学問的な文学作品を取り上げて，英雄的なドイツ的生活，ならびにその全生活領域における格闘と勝利を深めることができるようにすること。また自伝と手紙（偉大な人間の仕事）。他の教科，特に図画などと計画的に分業して芸術鑑賞。また何よりも説話，歴史のための図像，そしてドイツ中世の特選芸術作品。

⑥詩論

基本的には第四年級と同じ。バラードに特に留意すること。また各種バラード作品に固有の特別の表現手段と関係づけること。詩の構想と理解しやすい教育的表現でもって，素材と意味，体験と表現の内的統一を実現している詩人の芸術的意図を理解させるようつとめること。

（4）歴史（3時間）

「ドイツの始期からウェストファリア講和まで」の実態史，文化史については，文化科の全体教授が扱う範囲内で，適切な資料と古典の叙述とを注意深く利用しながら教えること。これらを扱うに際しては，歴史上重要で，生徒にとって具体的で身近に感じられるような人物だけを登場させるものとする。中世の典型的諸形態を理解することは，基本的に，ドイツの歴史に即して行なうものとする。外国史に関することがらは，偉大な発明発見の時代になって初めて，変化した世界情勢の結果として一層鮮明に扱わなくてはならない。ドイツの過去の個々の歴史像は，公民教育に役立つと同時に，中世の国家・経済諸形態を具体的に理解することにも役立つものであることが望ましい，例えば——ゲルマンの統治形態，封建制度，大皇帝の時代までのドイツ帝国，十字軍の結果としての外国文化との接触，都市制度，領主高権。ドイツの東方拡大と国境地帯の個別の形成史は特に重視すること。宗教，ドイツ語，図画の学習と関連した文化科の考察では，各時代の重要な生活形態すべてに明瞭なイメージを刻ませること。その中でも特に重要な点は次のもの——ゲルマン古代，フランク王国の文化状態，

騎士制度の発達，軍制，裁判制度の発達，市民，農民の成立，である。

（5）地理（2時間）

西ヨーロッパ，ドイツ人・ゲルマン人の隣国——ドイツの南方，北西，北方——，東ヨーロッパ。これら各国の自然状態および経済・歴史状況に規定された土地状況，国家形成。国境，言語・国民性・信仰上の境界の可変性と相違，一致。時代の経過の中でのドイツ国境の変化。ヨーロッパに暮らす在外ドイツ人。農業，鉱業，大工業の主要地。人口密度。交通の幹線，ターミナル。この学年でも，政治地理，経済地理がこの学年の自然地理から発展することが求められる。

第五年級，第四年級の教育分野の中から，適当な事実教材をいま一度利用して本学年の地学の基礎を発展させることとする。漸次，地表上の大気についての大まかな理解——気候帯，気圧と等圧線，風力と降水量——と水についての理解——海とその干満，地下水，河川，海洋——。さらに岩石についての理解——石の成層，褶曲，断層，湿潤風解・乾燥風解，崩壊運動・造山運動，火山と地震，氷と氷河——。

数量的地学の再学習，深化。恒星日，太陽日。一年の意味，季節，カレンダー。

5. 第三年級上級

（1）福音派宗教（2時間）

イエスの物語を共観福音書と関連づけて教えること。寓話ならびに山上の垂訓を詳論するときは，必ずその現代的意義に配慮すること。重要な箇所は特別に教えるものとする。我らの父を，第三信仰箇条〔聖霊信仰〕に付された〔ルターの〕解説を引きながら教えること。

この学年の全体課題に対応して，敬虔主義と啓蒙主義の時代の具体的な姿が分かるよう資料を使い，また大まかな関連や主要な思想潮流に分け入りながら教えること。教会建築，教会文学，教会音楽にみられるプロテス

タント教会芸術。福音派の礼拝，ならびにこれが個人，教区民の宗教生活にもつ意義。

(2) カトリック派宗教 (2時間)

聖書の授業で扱った聖書史と結びつけて主イエスの生涯と教化活動を全体的に復習してから，新約聖書の神の国を教えること。新しい心，神への信頼，へり下り，救け赦す愛としての神の王国。新しい人間の文化に対する姿勢（労働，富，国家，家族）。可視教会としての神の王国。重要な教義のところどころを心に刻み付けること。

教義問答書教育の目標は，第一信仰箇条〔父なる神信仰〕と第三信仰箇条〔聖霊信仰〕という教義問答書教材の最終的な説明と習得，ならびに教理神学から選んだ数章の最終的な説明と習得を行なうことにある。聖書と伝承。信仰の不可思議。三位一体。人間の生成と救済。教会ならびに人間心性の中における信仰心の作用。宗教的人間。信条と行い。秘蹟。労働と禁欲の生活の中の礼拝。聖ミサ典礼の詳細な描写。

ア. 教会史

三十年戦争終結から19世紀初頭までの教会史の時代ごとの変遷の姿。その場合表面的な事件はつとめてこれを後景にしりぞけ，各時代の理解を深めるために，教会の内外を取り巻く時代の精神的諸潮流を描写することが必要である。ドイツ諸国の教会と新教主義。プロテスタント諸派。大英帝国，アイルランド，オランダのカトリック教徒。領主絶対主義。ヨーゼフ主義。啓蒙主義と不信仰。フリーメーソン主義。フランス革命とこれが教会に及ぼした影響。

(3) ドイツ語 (5時間)

① 音声学

言語史に時々触れながら，音声学のまとめと補足を行なうこと（高地ドイツ語の音の推移は必ず！）。方言，標準語，外国語を対比させ，発音表に

即してこれの反復練習と要点のまとめ。この場合唱歌の授業との関連を考慮に入れるとよい。時折ドイツ語の別の方言に触れるのもよい。

②語論，文章論

復習に際しては、品詞間の移り変りについての学説を概観しておくこと。造語の音節ならびに語合成についての学説を深めること。語義の変遷についての概観。ドイツ語のかたちの美しさ。宗教，歴史と関わらせてルターのドイツ語。借用語および外国語に照らしながら，ドイツ語が文化的依存関係の中でどう影響されたかを教えること。例えばフランス語，ラテン語の影響。また近代の多様な文化領域の中での語借用について（学術的・外国語，芸術用語，経済・軍事・国家関係用語）。ドイツ語化の歴史を幾例か。職業語にも言及すること。地理，歴史の授業と結合・関連して言語地理学。これは方言，外国でのドイツ語，ゲルマン諸語を特に取り上げるものとする。言語境界，言語島の変動。ドイツ語正書法入門。

③文体論

新聞ドイツ語，書物ドイツ語を取り上げて言語感覚を養うこと。文法的に応用可能な文節の作りかえ練習。これはできるだけ新聞や公的生活の中の事例にもとづいて行なうことが望ましい。また論理上，文体上の観点を重視するものとする。

④朗読，報告，自由スピーチ

第三年級下級におけると同じように自由スピーチ，報告の練習。クラスの中で自由討論。

⑤書き方練習

統語論の手法を上手に応用させる，という点を特に意識しながら文法練習，および直接話法を間接話法に書き換えること。これまでと同様に全教科で記録をとること。現象，状況，人々を正確かつ具体的に再現する，という点を強く要求しながら，これの観察，表現を計画的に指導していくこと。叙述練習。これには他教科の読物，教材を慎重に転用することも含む

ものとする。読んだものについてのちょっとしたまとめと、事実の報告、内容の概括。論理的視点にもとづいて文を組み立てることに習熟させること。作文。これの数、種類、時間数は第三年級下級と同様とする。

⑥文学作品

第三年級下級でと同じように、歴史の授業でこの学年の全体教授として定められているテーマ「フランス革命の時期までの、他のヨーロッパ諸民族との関わりの中のドイツ」に対応して、これと関係するもの。低学年で体験した題材を、芸術的な価値が高く学問的にも重要な文献を十分に引証しながら、明瞭な理解にまで高めること。経済、社会方面を特に重視すること。また、科学技術による自然征服にも及ぶこと。ドイツ民族の過去の経済的、歴史的、文化的なあり方を示すもの。また唱歌の授業と関係させて、この時代のドイツ音楽史の描写も。ドイツの東部植民、飛び地・外国におけるドイツ人。地理上の発見、大航海。近代小説、ポピュラーな歴史小説に描かれた歴史像。価値あるドイツ文学、翻訳の中にあらわれた外国の歴史像にも言及すること。この課題に対しては個人読書の力を計画的に育成するものとする。これと同じ考え方が、以前の学年の古典叙事詩を引き続き復習・拡大させて文学作品の選択を行なう際にも必要である。現代に至るまでのバラード。牧歌、小叙事詩。第三年級下級でと同じように詩の暗誦。演劇指導は、演劇のテクニックを教えるというよりは、表現されたものを直接、具体的に掴み取るという点に努力しなくてはならない。演劇を深く理解させるには公演を訪れること、劇場の歴史に時々触れてみる必要がある。読んだことのある文学作品の作者の中できわめて有名な人々。民謡収集家の中の代表者を幾人か。

芸術鑑賞をするときは、ここでも学年の文化科のテーマに即して、当該年代の典型的な建築・造形芸術を扱うように配慮すること。折に触れて、この時代の文化段階を今なお保存しているものにも配慮するとよい。この場合、ドイツの芸術に及んでいる外国文化の影響も見落すことはできない。

⑦詩論

ここではバラードの本質を、歴史的民謡や個々の作品の作者を扱うことによって深く理解しなくてはいけない。物語、小説、演劇はいずれも、美的楽しみに奉仕する芸術形式・芸術媒体であるということを漸次理解させるものとする。

（4）歴史（3時間）

「1648年[30年戦争・ウェストファリア条約]から1815年[ナポレオン戦争・ウィーン会議]までの時代」の実態史、文化史を、資料をふんだんに用いて教えること。この場合、授業はすでに、年齢に応じて時代の大きな連関構造や主導思想を明瞭に浮かび上がらせることが必要である。ドイツ史の授業では、大国オーストリアの成立についての理解をまず押さえ、そのうえで大選帝侯以来のプロイセンの台頭を扱うものとする。フリードリヒ大王。対ナポレオン戦争におけるプロイセンの関与。ドイツ史と関連してヨーロッパの力関係とその変化を特に重視すること。ルートヴィヒ14世の時代。クロムウェルからウィーン会議までのイギリスの世界制覇の企て。フランス革命の時代。ナポレオン。アメリカ合衆国の成立。東部ヨーロッパの情況。歴史で戦争史を扱うに際しては、戦争技術の問題よりも全般的政治経済の考察を優先させるものとする。それゆえ、フリードリヒ大王の戦争と解放戦争の中の重要な部分を除いて、それ以外の戦争史では、その経過と結果を詳しく扱うことによって世界史発展の理解が深まるようにすること。ここで、英雄を称えたいという生徒の要求に応えるには、英雄的人間、英雄的民族の様子を描き出すことを考えるべきである。諸国の国内発展にとって重要な事実、生徒の年齢段階に配慮し、経済的・法的・文化的な諸問題と関わらせ、かつまたプロイセン国家の発展と関わらせながら教えていくこと。第六年級から始める第一外国語を用いているその民族の歴史は、歴史の授業の中でドイツ史と対比させながら教えるものとする。歴史の授業の延長上に教えるべきものは次のもの——公民と国民経済という視点、絶対主義国のあり方、18世紀の人民の社会構造、重商主義・重農主義の諸運動、フランス革命の原因と理想、シュタイン＝ハルデンベルク改革、自由貿易主義。これとの関連では、まず第一に憲法、立法

権・執行権，代議制度，自治，国内植民，国税，関税等の諸概念を目に見るようにすることが必要である。

(5) 地理 (2 時間)

非ヨーロッパ地域の地理。地理上の発見，ならびにこれのヨーロッパ化の歴史の中での主要な出来事。固有の文化を発生させた主地域（エジプト，中近東，インド，東アジア）のことを繰り返し学習すること。熱帯のジャングルや河岸林，北欧原生林地帯，ステップ，砂漠の植生ならびに生物地理的特徴。熱帯，亜熱帯，北欧のそれぞれの開発地域の特徴。ドイツと活発に政治的経済的交流を行なっている国々のことは掘り下げて扱うこと。非ヨーロッパ諸国の在外ドイツ人，ならびにかつてのドイツ植民地のことも取り上げる必要がある。外国列強の植民地属領のことは，歴史の授業とも関連して教えること。また，その経済的，政治的意味についても，特徴を押さえるものとする。民族学の初歩。世界宗教の分布。人口の疎な地域・密な地域，原材料地域・加工地域。公民教育との関連で販路，世界交易ルート。

数量地学を発展させること。地球の形状による磁針偏差，月食，日食，天体，彗星，流星。散策や遠足をしながら測量用地図の使用法に慣れさせること。

6. 第二年級下級

(1) 福音派宗教 (2 時間)

新約聖書学。新約聖書から重要部分を選び出して講述。これは宗教的覚醒ならびに現代の生活問題を，特にパウロに立ち帰って深く考えるために行なうものである。

学年の文化科との関連では，19世紀の教会史ならびに現代ドイツの宗教・教会生活に関わって選び出された伝記，書簡およびその他の資料を引用すること，また，重要な文化諸国でのキリスト教信仰の状況についても

触れるものとする。公民教育との分業で教会学，教会法。教会の共同生活。国内伝導，国外伝導。キリスト教の社会的意義。自由教会と諸宗派。現代キリスト教会の行き方。家庭読物を引用したり個々の教科とも関連させて現代文学，造形芸術の中の宗教的題材に言及すること。特に宗教的詩歌，音楽，絵画と関連させることは不可欠である。

（2）カトリック派宗教（2時間）

ア. 第二年級ならびに第一年級におけるカトリック派宗教教育についての一般的序言

第二年級ならびに第一年級において，教会の信仰教材は生きた生活と密着して感銘深く扱われ，そうして信仰心篤く倫理感強固な人間の育成に役立つことが求められる。今後はつねに学問的な精神の闘いという点にも配慮しながら，カトリック教の真実への信頼が根本から築かれなくてはならない。カトリック教の教義が，今までよりも一層深く明瞭かつ概念的に把握された理解に至ること，神の事蹟と人間の苦境との間の大いなる連関についても繰り返し強調されることが必要である。

個々の重要な諸問題がこのような関連をなしているとき，生徒たちがそれらについて自由に提案し，意見を述べ合うようにするべきである。適切な課題は生徒・教師一体になって討論し合うという形で扱ってよい。作業教育の原則である生徒の自主性が顧慮されなくてはならない。

系統的な護教論は放棄して，ぜひとも必要な個別の護教問題を，神，キリスト，教会論の中に組み込むものとする。

新約聖書読誦〔どくじゅ〕に際しては，適切な基準を定めて（内容と時間）イエスと預言者の思想界，および教会の精神についての生き生きした洞察が得られるようにしなくてはいけない。最高目標は歴史的理解の総和ではなく，唯一つ，教会の教えの權威を喜ばしく受けとめようとする精神の中から生まれる教会の教えの深い理解なのである。従って入門的問題，文献批判的問題は最小限にしぼることが必要である。努めるべきは，神の言葉をキリストの生涯の展開に結実させながら自分の力で読むことである。

イ. 第二年級下級の課題

第二年級下級においては次のものを教えるものとする：教会についての教え、教会の神性——教会の成立、維持、畏れ、全一性（バチカン公会議、第三章、信仰について、参照）——、カトリック教会、教会、キリスト教徒。キリストによって告げられたしるしのすべては、次のものに即して証明される——教皇首位権、使徒、全一性、神聖、正統性、破壊不可能性。東方教会、宗教改革時代の教会建設。

キリストの後身としての教会。教職（機構、無謬性、教えの告知、自由なる探求、異端）。司祭職（捧げ物、秘蹟、祈りにおける教会の仲保者活動、司祭職一般、正統な敬虔という教会の性格。司牧職（清浄への教育、清浄の母としての教会、教会法、禁書目録、教会の刑罰、教会運営、牧師生活の意義）。

教会の神聖の必然性、心身についての教会の考え方、非カトリック信者の神聖さ、国内国外伝導、カトリック教会と他の教会（改宗者、統一の努力、寛容、キリストの愛）。教会と社会、教会と家族。教会と国家（権威の宗教的聖別）。教会と経済活動（経済活動における宗教・倫理的力のもつ意義）。教会と教育、教会と芸術、カトリック文学。使徒物語の講述は原始キリスト教会の生成と考え方の中で扱うこと。

第二年級下級を卒えて、多くの生徒は実社会に入るわけであるから、信仰の基本問題（神の實在、キリストの神性）を護教的に扱うにあたっては、彼らの年齢段階に相応した扱いが不可欠である。

ウ. 教会史

19世紀から今日に至る教会史、特にドイツでの発展を考慮して。扱うに際しては、ここでもできるだけ指導的人物の生きた姿に注目してゆくこと。ドイツ教会の新秩序、管区配置。カトリック生活に新生をもたらした人々（ベルンハルト・オーヴァベルク、レオポルド・フォン・シュトルベルク、ザイラー、クレメンス・ホフバウアー、ゲレス）。ケルン紛争。社会問題（ケッテラー、コルピング）、バチカン公会議。文化闘争（マリנקロット、ヴィントホルスト）、最近の教皇。教会の現状、伝導制度、カトリックの連合について。最近の修道会。世界大戦と教会、教会と革命。遠

足と観察では、できるだけ近現代の教会芸術の発展を目のあたりにさせることが必要である。

（3）ドイツ語（5時間）

①音声学

中世高地ドイツ語入門と関連させた音声学。

②語論，文章論

語論も、中世高地ドイツ語と言語史的視点から関連をもたせ、ドイツ語辞書を活用しながら扱うこと。言語史的題材と関連づけて繰り返し扱うこと。スピーチの諸方式、会話用語。法律用語。姓名学の初歩。現代の言葉の変化。機械の発明や流通関係が言語に及ぼした影響。誤った言語使用を正しながら歴史的、基本的な言葉を教えていくこと。中高ドイツ語の初歩を、中高ドイツ語で書かれた作品の講述を通し、また以前の言語学史教材を用いながら教えること。

③文体論

文体論の視点から見て芸術的とみられる文学作品（思考の鋭さ、印象深さ、声喩法、抑揚、情景の点から）を考察すること。言語感覚をみがく訓練を継続すること。

④朗読，報告，自由スピーチ

文学作品を明瞭かつ印象深く言葉を選び、文を組み立てて口頭で述べる練習。ここでは要求を次第に高めていくものとする。校内の弁論を継続すること。

⑤書き方練習

いろいろな傾向の短文の書き下ろしをして、文体の力を高めるようにする。それらとしては——観察したものをありのままに書きうつすこと、対象物や見たものを短く叙述してみること、文の基本要素をふまえて描写報

告を行なうこと、また、感じたままを表現すること、文学作品の感想文——がある。作文のテーマの選択には、個人読物、学級読物も用い、同じような視点に基づいて他教科でも行なうものとする。体験文、感想文はすべて生徒の自由選択に任せるものとする。作文は9回以内、うち5回は学級内での作文とする（学級内作文は週3時間を超えぬものとする）。第三年級でと同じように文の成分の学習。

⑥文学作品

この学年の文化科、公民科の課題である「19世紀の理解」をここでも常に考慮しながら、芸術的、学術的な文学作品を扱うものとする。この時代をよく表現し、かつこの学年の理解力に適した伝記物語、小説。これらは現代にまで至るものとし、かつ、かなり古い時期のものも原則として排除しないこととする。それを、個人読書も計画的に織り込みながら扱うこと。演劇読物は国家思想ならびに民族、国家、社会関係を含む作品が望ましい。時代を反映した叙情詩。特に大きな歴史的転換期におけるもの。ことわざ、歌曲、郷土芸術の中に表れた郷土。

学術的文学作品を扱う場合、時代の重要人物をめぐる歴史を書簡、演説、日記を通して理解させるように努めること。さらに代表的なドイツ人の生涯を伝記を通して理解させるようにすること。地理、公民と結びつけて、現代の経済、社会生活、とり分けドイツの経済、社会生活の重要性を、よく工夫して述べてあるもの。重要な論文——これには自然科学方面のもの、およびこれが個人生活、国民福祉にどう関係するかを述べたものも含むものとする。

中高ドイツ語会話授業と関係して、中高ドイツ文学のやさしい部分、特に民衆叙事詩。

第三年級上級でと同様に芸術鑑賞。これも19世紀と関係づけること。また建築物、街路、都市景観を通して現代の芸術潮流を理解させること。図画、工作教育と関係して技術、芸術産業の中に表れた時代の芸術感覚。

⑦詩論

演劇論的、技術論的な視点は一先ず避けながら、演劇の内面的芸術形式

の理解をはかること。これは個々の作品に即しながら行なうものとする。叙情詩の教材研究に際しては、詩表現を通してその芸術的価値が明らかにされるものであり、そこに個々の詩人の特色が鮮かに表われているということをしかり述べておく必要がある。

（4）歴史（2時間）、公民（1時間）

ア. 歴史

「1815年〔対ナポレオン解放戦争〕から現代に至る近代史」。この時期の政治史の概観——国民主義と自由を求める諸運動、特にドイツの運動に配慮すること。領土分割、特にイギリス、ロシアという世界帝国の成立と非ヨーロッパ諸列強の台頭（日本、アメリカ合衆国）、これを大まかに概観すること。フランス帝国主義の強化。ビスマルクによる新生ドイツ帝国の創出。三国同盟の成立と政策、および英・仏・露間の協調〔三国協商〕。両者の確執の頂点としての世界大戦。ベルサイユ条約和平によるヨーロッパの政治的变化と聖ドイツ人、国土喪失、和平条約に伴う経済上の帰結。在外ドイツ人の状態の概観。戦争史を扱う際には厳格にテーマを限定し、ドイツ統一戦争と世界大戦の中から決定的な事実に限って扱うものとする。特に掘り下げて扱うべきものとして、19世紀における経済活動の本質変化ならびに社会的構造変化がある。産業、技術、発見、世界交通、世界交易の発展。できるならこれらを、それらの指導的人物と結びつけて扱えるとよい。ドイツの経済的飛躍と結びつけて農業労働諸条件の変化、ならびにドイツの経済生活の諸形態。1870年〔普仏戦争〕以後のドイツ。資本主義と社会主義。社会的諸階級——ブルジョア、労働者、産業中間層——と農業、それと国家、社会との関係。現代生活を推進させている諸力については、できるかぎり見学、観察を取り入れるとともに、時代の文化遺産を通してこれを目に見えるようにしなければならない。

イ. 公民

文化科の全体教授とり分け歴史、地理と有機的に結びつけた第二年級下級の公民では、これまでの公民教育の成果を総合して現代国家、現代社会

を歴史的生成の中に位置づけて理解させること、ならびに、これらが生徒たちにとってはどうしても関与せざるを得ない最重要の分野なのだということを実感的にも知らせ、かつ身近に感じさせることが必要である。その場合、公民的活動の予備学校たる学校生活が、歴史的政治的生活の基本概念の解明に向けて、またそれにふさわしい志操に向けて意義深く展開されることが必要である。授業での教育の中心はドイツならびにプロイセンの憲法である。1849年の憲法〔フランクフルト憲法〕と1871年の憲法〔ドイツ帝国憲法〕との比較を通して憲法規定のうちの最重要概念——たとえば君主政体、共和国、一院制二院制、議会主義、帝国議会、邦議会、連邦国家、連邦議会、帝国参議院——を明らかにする。さらにワイマール憲法の意味内容、とり分けドイツ人の基本権と義務。中級修了時までには最重要の行政機構、司法制度、軍隊、財政、税制について概観しておくこと。

(5) 地理 (2時間)

中部ヨーロッパの地理学一般——ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、エルザス＝ロートリンゲン、スイス、オーストリア、ボヘミア＝モラヴィア、西ポーランド、ダンチヒ、メーメル、バルト諸国。この授業は学年段階に応じ、事柄の多様な側面に基づいて個々の事実を大きな関連の中に位置づけてゆくものとする。また、いっそうしっかりと配慮すべきものとしてドイツの国土の開墾、防備、定住の諸事業。また、湿原と沼沢地、川と湖、海岸の水分代謝。さらに注意するものとして都市計画、建築様式、建築素材にまで入りこみながら種族構成と入植状況について。

歴史、公民と関係して特に重視すべきものとして経済、文化、政治関係。地下資源の豊富な場所への入植の増加と都市形成との関係。農業専門地域と工業地区。商業と商品生産、立地条件、交通条件との関係。

これまで学んだ一般地学の基礎を発展させ、特にドイツの自然に即して地球の歴史の主要年代を概観すること。その場合個々の地層の典型例に及ぶものとする。10万分の1のドイツ地図、地質地図に馴染むこと。両者は世界地理の教材として、また見学や遠足の際にも利用するものとする。

7. 第二年級上級

（1）福音派宗教（2時間）

宗教史に関わる宗教教育では、文化科の全体教授と関連させて重要な世界宗教ならびにギリシア、ローマ世界の思想内容に特に注目しながら、聖書の各篇の真実ならびにキリスト者の生活原理を取り上げてゆくものとする。この目的のため、宗教史から十分に資料を取り出すことが必要である。たとえばヴェーダ選集、ブッダ講話集、コーラン、そしてギリシア哲学者（プラトン、ストア学派）のもの、旧約聖書からとり出した宗教教材、および新約聖書の一連の重要な宗教的・道徳的真実など。ヨハネ福音書教材（部分撰）ではイエスの決定的な重要性を生徒に自覚させなければならない。

宗教史の授業の展開に次いで宗教教育は何よりも、中世宗教の全方面にわたる理解、ならびに主としてその現代まで貫く理念、生活様式を明らかにするものとする。純然たる史実や考証の類は一先ず措くか放棄して、中世キリスト教の最重要の縦糸、横糸を明らかにすることに努める。それらは——ヨーロッパキリスト教の本質、アウグスチヌスの世界史上の位置、教会の教育活動がローマ、ゲルマン民族に果たした役割、世界教会の理念と教皇制度、各教会の位置づけと実態、王権と教権との争い、スコラ哲学と神秘主義、中世人の芸術表現意志——である。イスラム教の中世世界に及ぼした影響。個人主義の出現に際しての〔中世キリスト教の〕再編、改造。ドイツ語、歴史の授業との分業で、中世の資料の講読。

（2）カトリック派宗教（2時間）

ア. 教育課題

キリスト——その人と事業。キリストの人と事業については、現代の必要性や問題関心にふさわしい形で述べていくことが求められる。個々に扱われるべきものとして異教文献、ユダヤ教、キリスト教文献をイエスの生涯に即して。キリスト教文献の確かさ。救世主、神の体現者としてのイエス。イエスの精神の気高さ。イエスの述べられた神の子、神の王国という

福音。イエスの語られた知恵。イエスの道徳的完全性（無罪と徳に満ちているさま）。イエスの奇蹟と学識。キリスト——神の第二位格（位格的融合）。救済の活動。イエスの贖罪の死。キリストとパウロ。崩壊した超自然的秩序の回復。教会による恩寵の分け与え。恩寵と秘蹟の教え，特に聖体秘蹟。キリスト——教会の主（ぶどうの株，ぶどう酒——エペソ人への手紙，コロサイ人への手紙と対比すること）。キリストの王国。立法者と世界の審判者。キリスト崇拜（歴史的概観とイエス信心の心）。キリストにならいて。マリア——イエスの母にして我らの母。

芸術の中に表れた典型的なキリストの姿の描写。共観福音書文典。

イ. 教会史——上級段階のための序言

ここでの教会史では，中級段階で獲得された知識の上にいま一步すすんでその本質を思想としてしっかり刻みこみ，また，支配的な精神潮流をきちんと理解することが課題である。したがって数世紀にわたる精神界の闘争の中での教会の位置をより鮮明に際だたせること，教会的生活の発展史を明瞭に跡づけること，いま焦眉の課題となっている多くの問題の解決に教会がどのような役割を担えるかを十分に認識させること——が必要である。生徒は，資料ならびに多くの文献に基づき，個々の重要問題を自由報告の中で論じられるようにならなくてはならない。教会史教育の最高目標は，信ずるところに忠実で，現代生活の中での教会に対して情熱を抱ける人間の育成という点にある。

ウ. 第二年級上級の教会史の課題

第二年級上級では，世俗史の授業と接続して教会古代ならびにボニファキウス8世までの中世を扱うこと。ただし，完全網羅は必要ない。キリスト教信仰が古代の異教乱立の中に確立されていった意義，ならびにキリスト教自体の宗教的意義をまずもって認識させるべきである。比較宗教史の方法，有効性ならびに誤りについて一瞥すること。最初の数世紀間の信仰闘争の中での教義の発展。古代キリスト教文学の展開。東方正教会ならびにローマ・カトリック教会の教義が，神学とキリスト教的生活に果たした意義。変化した世界の姿ならびに国民主義＝ゲルマン主義文化と古代キリ

スト教＝ラテン文化の融合。ベネディクトとベネディクト修道会。カール大帝からイノケンティウス3世までの神聖ローマ帝国と教皇権。ビザンチンの国教会制度。国教と対十字軍戦争。カトリック中世の精神生活，芸術生活。トマス・アキナスとスコラ哲学の意義。ボナヴェントゥラと神秘主義。台頭するドイツ神秘主義者。教会と民衆教育。修道会思想の発展。貴族とドイツの教会。中世の明と暗。

（3）ドイツ語（5時間）

①音声学

言語史に基づきながら音声学のまとめと深化。それは特に中高ドイツ語に注目してゴート語，古代高地ドイツ語の発音実験を行ないながらすすめるものとする。ドイツの各方言の詳細な考察。各方言の境界，ずれ，混淆。話し方技法の訓練。

②語論，文章論

構文上の特徴を引照しながら中高ドイツ語についての知識を深め，文献としっかり関係づけて近代ドイツ語の文章論を歴史的に理解させること。言語地図に基づいてゲルマン語，ドイツ語方言の歴史的発展を概観すること。語の空間的広がり，ならびに語の変化。語の元来の意味と新しい意味。言葉の意味内容の変化を文化発展と関係させ，またドイツ語辞典を引照しながら深く理解させること。文体論の視点から語結合ならびに構成法を扱うこと。

③文体論

より重要な新語法文体の紹介。これはつねに読物教材と結合して扱うこと。文体と人格，文体と人種，文体と題材，文体と民族性。文体逸脱との戦い。

④朗読，報告，自由スピーチ

口頭で上手に読み，報告することをより一層訓練すること。また，自由

発表の際の発表技法についてより一層訓練すること。

⑤書き方訓練

第二年級下級でと同じように小文の書き下ろし。論文形式での作文。これは、ドイツ語作文で可能なかぎり多様な課題を扱うということを十分に配慮してすすめる必要がある。機会があれば、ここですでに原典を自分で改作して書くということがあってよい。家庭読物も利用する。作文は8回以内。うち少なくとも4回は学級内作文とする。

⑥文学作品

歴史の授業と関連して、ドイツの精神生活にとって重要な題材をギリシア・ローマ文化の中から選びだすこと。特に重要なものはギリシア悲劇である。ホメロスからエウリピデスに至るギリシア精神の発展。ギリシア哲学者（プラトン）から題材を見出すこと。また、古代に関する文献および古代がドイツの文化、精神生活とどう関係するかについて述べた学術文献の中から、いくつか重要な論説をとり上げること。

この学年の本質課題は、中世文化が様々な生活様式の中でどのようなものだったかを、文化科の全体教授の中で可能なかぎり全体的に理解させるという点にある。その際、ドイツ語には特に、中世の精神文化、詩および芸術を紹介するという課題が負わされているのである。ドイツ語で扱うものは、ゲルマン的、古代的、キリスト教的なものの総合の時代の成立、偉大な黄金時代への発展、そして中世世界の崩壊に至る時代のものである。民族大移動期の文芸、文学に関しては、北方の精神生活にも目を向けるべきである（エッダ、サガ）。カロリング家の諸帝、オットー諸帝治下のラテン中世の典型的文芸で、翻訳されたものの中から幾つかを選んで。古高ドイツ語表現上の文化遺産若干。それらの芸術的価値にも触れること。中高ドイツ語最盛期の第一級文学のうち、比較的長い章節を抜粋して。たとえば民衆叙事詩、芸術叙事詩、騎士恋愛歌、民衆詩。その目標は読んだ作品の詩的特徴ならびに言語形式を理解すること、それも翻訳なしで発音を正しく、意味にふさわしく読むことを通して行なわなければならない。芸術的価値の高い翻訳や翻案は読書の幅を拓げ、かつ豊かにするのに有効である。中

世の散文，特に神秘主義者の散文は宗教の授業と分業して扱うことが必要である。市民的都市的文化の成立に関わるものとしては——民衆演劇，滑稽譚，職匠歌人の歌。ルネサンス，宗教改革期のものとしては——ドイツ人文主義者のもの，ルターのもの。

⑦研究書

研究書で中世文化のその他の領域も補うこと——特にゲルマン民族の神話，法，経済，習俗に関して——。

⑧個人読物

個人読物として，夏には特に古典古代を扱った近代の文学を，冬には古ゲルマン，中世を扱ったもの，特にロマン主義文学を選ぶものとする。

⑨古代研究

ドイツの大地に残っている先史時代の遺物。古ゲルマンならびにその影響，特に民族大移動時代のもの——観察して察知できるもの——。ドイツ人種学。

⑩芸術鑑賞

美術鑑賞は建築・造形芸術の中から数例，それも典型的な事例を選んでギリシア人の様式美を学ばせるものとする。その中で特に目指すべきものは教会的中世，騎士的中世の生活感，イメージが芸術にどのように表現されているか——かつまた，これらがギリシア人の多様な芸術意志の中にどのように表現されているかを鮮明にすることである。ローマ様式，ゴート様式，ルネサンス様式の建築思想。ドイツ中世の典型的な絵画作品数例。ケルンの巨匠たちからデューラー，グリュネヴァルトに至るドイツの大画家たち。フラマン人の絵画。15－16世紀のドイツ絵画とイタリア絵画を対比することは，ドイツの芸術様式の特徴を際立たせるのに役立つであろう。

⑪詩論

文学作品と関連して韻律法の独特の法則を教えること。頭韻の成立からオーピッツに至る詩論発展史。基本は読書によって民衆叙事詩，芸術叙事詩，騎士恋愛歌，民衆詩の全体特徴を理解させることである。

(4) 歴史 (4 時間)

ア. 上級段階のための序言

上級段階では、これまでに獲得した直観的理解ならびに中級段階で到達した知見に基づいて歴史問題の理論的，概念的理解にすすむものとする。この場合教材を精選して歴史展開のポイント，結節点を際立たせ，歴史全体の中での決定的な意義を明らかにすることが必要である。適切な箇所では，歴史の理論的理解を歴史哲学的考察にすすめるものとする。歴史と内容的に関連する文化科教材が他の文化科で十分に扱われなかったとき，これを国家史と直接関連させ，国家を他の文化領域と分離不可能の一文化現象として理解させることが可能である。適切な資料講読は作業教育の方法で生徒に示さなくてはならない。この中でたとえば，資料の中の事実を確かめたり，歴史解釈，歴史法則を学びとることができるであろう。歴史研究の古典の重要な一節を扱いながら，偉大な歴史家の精神と研究方法の紹介を行なうこと。これを通して，生徒が学年の歴史授業に積極的に立ち向かえるような自主的学習態度を育てるものとする。それと同時に，自主的学習協同体は歴史授業と内容的につながっていないなくてはならぬものとする。

イ. 第二年級上級の課題

第二年級上級の教授課題は次のもの，即ち——「古代史とローマ帝国の興亡から中世史」。

古代史描写は基本的にギリシア・ローマ史に限るものとし，特にその後の歴史，中でもゲルマン・ロマンス語系諸民族に及ぼした直接の影響を際立たせるものとする。それゆえ，ギリシア史の中で特に掘り下げて扱うべきものとして，ペリクレス時代とヘレニズム期，ローマ史では共和制最盛期から古代文化没落までのローマの世界支配。精神科学と芸術に果たした

ギリシア人の世界史的貢献，ならびに国家と法に果たしたローマ人の世界史的貢献は，具体的な事例を挙げながら特別に言及すること。また，公民の基本概念を説明するに際しても，ギリシア・ローマの国家，社会生活は，率直な公民性の現れが見てとれるという点で重要な意義をもっている。その場合触れておかねばならぬ点として——家族と家柄の意味，習俗・言語・文学・芸術・宗教を通しての統一的な国民性，古代国家の典型的特徴，が挙げられる。

授業の主たる目標は，この時代の政治，経済，社会構造の発展史と有機的に結合させて，ゲルマン古代ならびにドイツ中世文化への導入を行なうことである。ドイツの固有の特徴ならびに中世文化全体における役割をよく学ばせることが大事である。中世の理解にはアラビア文化の意義が重大なので，これを欠くことがあってはならない。教材選択に当たっては，政治史では中世の社会状況の中から国家が発展してきた様子，また，これの対極にある社会組織たる教会の発展史を前面に出すこと。さらに，公民に関係する考察の場合，一方で中世と現代国家とのちがい，他方で中世と現代との連続が鮮明にされるべきである。中世の社会形態を概観する際，最も望ましいのは，初期は共同体的自由の時代として，フランク王国期は荘園制ならびにこれの経済・社会関係が支配した時代として，ドイツ皇帝期は封建制ならびに騎士社会の特徴を備えた時代として典型化することである。

（5）地理（2時間）

ア. 上級段階のための序言

上級諸学年の地理の学科課程は，数学・自然科学系科目，歴史・精神科学系科目との分業で行なうことが必要である。そのため，地理で扱うべき課題群の選択ならびに配列は，大部分これら諸科目の学科課程，教材に依存することになる。地学方面の授業では，数学，物理，生物，さらに公民，歴史とも相互に交流して，文化が自然の中に根を下ろしているということ，法則性を跡づけながら特に強調すること。生徒には機能主義的思考法に習熟させ，発生的理解を育てるように。また，国土と国家，土地と人間の

関係について明瞭な観念を身につけさせて公民の理解を深めること。したがって地理学の最終的教育課題は、中級段階の教材を拡大することで終わってはならない。むしろ求められるべきは、諸民族の経済、社会、政治機構を考察することによって個々の国々を空間的にグループ分けし、これを徹底研究すること、各国の気候的、民族誌的、文化・経済・交通地理学的、および政治的関係を浮き彫りにし、あるいは比較することにより、その相互関係を徹底研究することである。その場合、問題になる課題群としては次の各々であろう——人間の土地への依存とそれによる人間支配、経済の発展段階と形態、原材料生産と加工、物の価値が供給と需要に依存していること、純粋精神文化を促進するか阻害するかは各国の特性・各民族の置かれた状態に規定されていること、国家と土地との関連、自然的・歴史的に成立した国境、自然の入植と計画的入植、世界交易の拡大とその方法。また、地学の授業では、簡単な天体系を使って地球世界を生徒に大略理解させること、各種の運動現象をもった地球をこの全体体系の中に位置づけることが必要である。最終的に地理授業は地理の歴史に入るものとし、貴重な論文、適切な作品を読むことによって地理的問題を自分で、あるいは文化科の学習グループの中で深める準備を行なうものとする。しかしながらそうは言っても、次に示すような内容分けが、多くの可能性の中の一つとして、できうるであろう。

イ. 第二年級上級の教育課題

序言で述べた意味での地理。最も望ましいのは、地上の最重要大国、主たる経済地域である。すなわち、北米のアメリカ合衆国、スペインとスペイン語を話す諸国、世界帝国イギリスおよびフランス。

8. 第一年級

(1) 福音派宗教 (下級 2 時間, 上級 2 時間)

a. 第一年級下級

第二年級上級の学科課程を有機的に継続すること。また、それと同様の

方法で、中世末から18世紀末までの宗教発展の頂点ならびに分岐点を教えるものとする。中でもプロテスタンティズムの宗教的、文化的、精神史的意義の理解は本学年の主要課題である。ルネサンス時代における中世的世界の崩壊。ドイツの宗教改革、とり分けルターの作品については、パウロ書簡の中から該当する箇所を引用してルターの特徴的な部分を掘り下げて講述すること。ルター主義、カルヴァン主義、トリエント公会議後のカトリック教——三者の決定的な違いならびに後世に果した意義。近代世界像の成立。プロテスタンティズムと啓蒙思想との対立。各箇所ではつねに原典を引用すること。他の科目の中で育った意欲につねに配慮しながら、ここで出てきた個々の問題の考察に締めくくりをつけることができるならば、生徒に新約聖書作品中のキリスト教の真理、福音の真理を身近に感じさせることができるであろう。

b. 第一年級上級

この学年の全体課題に対応して、宗教教育ではドイツ語、哲学との関連で、ドイツ理想主義との内在的対立を、原典講読（たとえばヘルダー、シュライエルマッハーなどの）、あるいはキリスト教の宗教的真理を個別に明らかにすることを通して教えるものとする。その際特に哲学、文学の中のこれにふさわしい思潮グループ、ならびにキリスト教に敵対する諸潮流に注目することが必要である。歴史、公民との関連では国家、社会生活に対するキリスト教、教会の意義を個別の問題、現代的問題に即して議論することが大事である。同様のやり方で個人の生活問題に即しながら、生きた責任意識を目覚めさせるようにしなくてはならない。文化科の学習協同体では、宗教教育においても生徒が特に重要な個別問題についてこれを探求することが可能なのである。同様に宗教教育にあっても個人読書が学問的課題、教育的課題にとって有効だといえる。それとともに、文学や造形芸術と宗教との関係も特に大事だと言わなくてはならない。

（2）カトリック派宗教（下級2時間、上級2時間）

a. 第一年級下級

ア. 教育課題

キリスト教の神概念。理性の光の中の神。人間の神信仰。神体験と神の証明（ヴァチカン総会議，Ⅲ. c. i.）。神と世界，神なき世界解釈（一元論）。人格神なき世界解釈（汎神論）。発展思想。人間と動物。精神性，霊の不滅性。

啓示の光の中の神。啓示の概念，可能性，必然性，特徴。神の本質と属性。創世教義。創世記録。神の摂理。三位一体。

超自然的秩序の創造者としての神。原罪。救済。予定説。世のなりゆきの謎とキリスト教の解答。悲観論的世界観察，楽観論的世界観察。無限なる神。真実，正義，美という理想。真実の宗教性。神信仰と人生の幸福。信心と不信心。賛美歌や預言者の中の神思想を扱った箇所をえらんで文献講読。ヨハネ福音書の抜粋。

イ. 教会史

教会史ではボニファキウス8世からフランス革命までを扱うものとする。中世の解体過程。中世末期の国家と教会。ドイツ民族の宗教・道德状態。人文主義とルネサンス。教会の改革努力。ルター派宗教の発展。ドイツのプロテスタント化。プロテスタント主義の三大原則〔信仰のみ，聖書中心主義，万人司祭主義〕。トリエント公会議と教会改革。聖紀元。修道会生活と伝導活動。国教会権の形成。啓蒙主義と不信心。神と超自然を欠いて生活を構成しようとする試みたる啓蒙主義の意義。ドイツ古典主義者の宗教，教会に対する位置。1555年〔アウグスブルクの宗教和議〕以降のプロテスタンティズムの国内発展。革命前夜のフランス，ドイツの宗教・道德状態。宗教史の目標は，人文主義，批判主義，自然科学理論，主観主義の結果どのようにして現代文化が起こったかを認識させることにある。

b. 第一年級上級

ア. 教育課題

カトリック教会の偉大な個人的，公的使命への導入を行なうこと。

道德的生活の宗教的基礎は，神意にしたがうことであって我意によるも

のではない。戒律とは何か、良心とは何か。良心の葛藤。教育と自己教育による意志の陶冶、意志の自由。義務と愛着。徳。徳と至福。原罪と原罪からの解放。

個々の責任範囲——狭義の宗教上の義務。教義と教義不信。信仰と知。個人の祈りの生活、教会の祈りの生活。典礼を最終的に学問的、実践的に取り扱うこと。カトリック教徒と教会（教会とともに感ずること）。行ないのカトリック教徒。カトリック教の家族理想——一体、非解消、婚姻の神聖。教会の婚姻法制定。性的問題。教育における権威と自由。教会と現代の青年運動。国家に対する義務、国家と教会。国家と学校。国家と信仰の自由。カトリック教の国家理想。ナショナリズム。カトリック教徒と人間社会、生活防衛。決闘。アルコール問題。聖職と世俗職。職業選択。職務への忠実。隠遁と現世超越。営利活動。教会と社会問題。個人経営、協同経営。カトリック教徒と教養。個人理想——真実、道德的自由、愛。人格の宗教的聖別。

旧約・新約聖書の道德観。パウロ書簡（コリント人への第一の手紙）の講述と説明。

イ. 宗教史

教会史では、フランス革命から現代までを扱うものとする。フランス革命とこれの教会への影響。世俗化。教会秩序の再建。政教協定。1848年〔三月革命〕までのカトリック意識の再生。国教会主義、自由主義の挑戦。1850年から1870年までのプロイセンの国家と教会。バチカン公会議〔1869－70〕の意義。文化闘争。1870年以降の教皇制度。レオ13世。19世紀カトリック教の隣人愛（カリタス）。教会と教育問題。世界伝導。最重要文化諸国での教会の現状。近代主義。ギリシア＝東方の教会協同体。現代プロテスタント内の諸潮流。オカルティズム。教会と世界大戦。しめくくりの復習と自由報告では、生徒が、教会史の全学習過程の中から神の王国たる教会の変遷と闘争にとって最も重要な出来事ならびに理想を、縦断的あるいは横断的に把握できるようにする必要がある。

(3) ドイツ語 (下級4時間, 上級4時間),
哲学講読 (下級1時間, 上級1時間)

①言語科学

これまで学んできた言語史教材を使って言語心理学, 言語哲学, 言語美学方面の考察を外国語と関連させて行なうこと。民族の精神性格の表現としての言語の多様性。言語美学——ドイツ語がもっている各種の文化課題に適応する能力。重要な言語研究者, 言語創始者の論文。ドイツ文学の発展の中で最重要のもの。

②文体論

交際, 公的生活, 芸術と各種言語目的によって異なる言語文体手段。

③朗読, 報告, 自由スピーチ

自由発表, 論争, 芸術的朗読を計画的に練習すること。話術は音声生理学と関連させ, 健康学, 美術的見地のもとに教えるものとする。

④書き方練習

できるだけ生徒に移動の自由を保障しながら, 第二年級でと同じように書き下ろすこと。宿題作文の補足として, 幾つかの原典にもとづいて比較的長い論文を書かせること (研究論文)。作文数は8篇以内, うち4篇は学級内作文とする。

⑤文学作品

第一年級のドイツ語は, 教育活動の中心にドイツ的生活の最高の教養時代たる「ドイツ理想主義」を置く。第一年級のドイツ語は, ドイツ理想主義をその精神史的諸前提の中から理解し, それが全生活領域に対してもっている根本的意義を明示するものとする。また, ドイツ理想主義の大作家, 思想家をできるだけ深く掘り下げて理解することに努め, 古典時代から現代までの時代を理解するための架け橋とする。

ア. 第一年級下級

その際、第一年級下級には特に、近代精神の成立と関連してドイツの精神文化の復興を理解させるという課題が設定されている。三十年戦争との関連およびこの時代の代表的人物若干。啓蒙主義の時代ならびにこれに対立する諸潮流を、他の文化科諸科と関連させて。クロプシュツック、レッシング、ヘルダーの全作品をヨーロッパの文化潮流全体と関連させること。同様のことは疾風怒濤時代、分けても若きゲーテ、シラーの場合にも言えることである。演劇講読と関連してドイツ劇場史にも言及する必要がある。

イ. 第一年級上級

第一年級上級の目標は「ドイツ理想主義」を如上の精神運動の完成、統合として明らかにすること、ならびにその偉大な代表者——中でもゲーテ、シラー——がドイツに及ぼした大いなる影響について理解させることである。そこで授業では、個々の作品の講読に留まることなく、各作品を作家の生涯や全時代背景と関連させて理解することが必要である。ドイツ理想主義と有機的に関連させてロマン主義を扱うこと。世界市民から国民国家への移行のところではハインリヒ・フォン・クライスト。さらに文学と造形芸術、音楽との関係、戯曲と舞台との関係。

ゲーテ以後の文学は、それ以前に扱った時代の継続・発展として多面的に扱うことが可能である（レッシングからハウプトマンまでの市民演劇、世界市民から国家公民、シラー、ヘッベル、ゴットフリート・ケラー）。文学の変遷を概観する場合でも（オーストリアの作家、青年ドイツ派と政治詩、芸術的リアリズム、印象主義・表現主義）、テーマ分類、問題分類を行ないながら 19 世紀ならびに現代芸術の発展の中でこれを考察しなくてはならない。特に個人読書——必修、選択を問わず——や自由な学習協同体の中で、自分たちが選んだ中テーマを調べたり計画的に行なわれる発表をする際注意すべきことは、現代文学に対して生徒の感覚を目覚めさせ、かつ計画的な学習の中でこれを鍛えていくことである。この場合、重要な外国文学諸潮流に言及することは絶対必要である。だが、そのために授業学習の中でドイツ理想主義が中心課題から締め出されるようなことがあって

はならない。

⑥研究書

第一年級上級においては、研究書は特に必要である。文豪の著作から題材を選びとる場合でもそうである。研究書は近代の全生活領域に関するものとし、これの適当な箇所または全篇——そこに19世紀ならびに現代の精神発達をうかがい知ることのできる自然諸科学や経済生活、公民的・社会政治的諸問題、芸術科学的諸問題への解明があふれている——に及ぶものとする。この課題のために、全授業科目は計画的、相互関連的学習として展開される必要がある。

⑦哲学講読

特別な課題として哲学講読を指定する。哲学講読は、上級の全教科を哲学的に意味づけることによってこれの準備あるいは支えとなり、また殊に偉大なドイツ哲学の精選された章節や作品を講読することによって学年の文化科の課題全体に寄与するものである。なぜなら偉大なドイツ哲学は、当該時代の思想内容に形を与え、国民文化の全体像をまとまりあるものにし、かくして、現在を過去からつまり国民文化の持続的作用力という考え方において把握しようとするものだからである。そこで可能なかぎり、ドイツ理想主義の大いなる思想連関の中から——その中心はカントである——一人で理解できるものを選ぶこと。

⑧民族研究、古代研究

童話、サガ、神話、民族歌謡の中の心理。古典主義、ロマン主義および現代の各時代における民俗学研究。

⑨芸術鑑賞

第一年級下級では、学年目標に照らしてバロックの建築芸術、中でもドイツのバロック建築芸術。レンブラントからルーベンスに至る低地ドイツ美術の発展。第一年級では新古典主義。19世紀のドイツ絵画の復興、現代の芸術潮流。

⑩詩論

これまで扱ってきたものを整然とまとめて、詩の形態要素、種類、流派について歴史的かつ根源的に考察すること。特に配慮すべきなのは文体傾向と審美面での各様式——中でも悲劇か喜劇か——である。

（4）歴史（下級 3 時間、上級 3 時間）、 公民（下級 1 時間、上級 1 時間）

a. 第一年級下級

ア. 歴史

「中世末からフランス革命までの時代」。政治史の教材選択をする場合に努めるべきは、近代国家をヨーロッパ諸国の生成発展過程の中で理解させるという点である。それ故ドイツの発展は、ヨーロッパ列強の歴史との関わりで教えること。中世の文化理想の克服が世俗文化の勝利、個人主義の出現、国家意識の形成によって成し遂げられたことを教えるものとする。市民階級の台頭と強引な勢力拡張、国民国家の成立（スペイン、フランス、イギリス）、ドイツ国内での領地形成。ルネサンス、人文主義、宗教改革。絶対主義の役割。ヨーロッパ列強の世界支配権獲得闘争と、これがドイツに及ぼした影響。ハプスブルク家の世界帝国とバルト海支配権闘争（ポーランド、デンマーク、スウェーデン、ロシア）。プロイセンの台頭。植民地諸国、アメリカ独立戦争。フランス革命と対ナポレオン戦争の中でのドイツの改革。

他の文化科諸科との分業で当該時代の指導理念、近代精神の発展に関わった諸民族の役割——特に啓蒙時代——を理解させること。併せてそれらがドイツにどのような意味をもったかも学習させるものとする。歴史では地理と関連して特に経済状況、社会状態、社会運動方面の分析を行なうこと。それらとしては、中世の自然経済がどのようにして貨幣・流通経済に取って代られたか、手工業のしくみと特色、ブルジョアの富の蓄積と企業家精神の成立、重商主義の理論と実際——など。社会運動の歴史では特に領邦君主間の抗争、貴族と都市、同業組合と職人、農民の無権利状態、

農奴の状態，世襲的臣従関係を。

イ. 公民

公民ではできるだけ歴史の授業での課題群をとり出し，分けても適切な資料を活用しながら深めていくものとする。掘り下げて扱うべきものとしてはたとえば——ローマ法の復活，絶対主義国家制度，近代兵制の成立，公務員制度，法典編纂，国家財政，税。自然権，社会契約思想，人権。国民的立憲国家の成立。世俗化，政教和解。

a. 第一年級上級

ア. 歴史

「ウィーン会議から現代まで」。第一年級下級の教育目標を継続し，政治史の中心は国民的立憲国家の発展におくものとする。王政復古と自由主義の時代，西部・中部ヨーロッパでの革命，そして中でもドイツ三月革命。国民的統一を求めるイタリア，ドイツの闘争。ドイツの課題，解決策の一つとしての小ドイツ主義とビスマルクの活動。武装兵力による和平たるヨーロッパの均衡維持。1870年以降のドイツの国内政治の展開については，あらゆる側面から行なう必要がある——つまり，憲法制定，軍事，司法，社会政策，流通・交易・財政諸法，国家と教会。ドイツの大政党と経済機構の意義。植民地政策。帝国主義と同盟政策，三国同盟と三国協商。世界大戦の主要な事実とベルサイユ和平。革命とドイツ再生。

19世紀の支配的な精神潮流については，文化科の全体教授と分業して鮮明に描き出すようにしなくてはならない。経済史で扱う主なものは，近代国民経済の成立と関わった国家と教会の変遷。銀行と株式市場，貿易，交通，手工業，農業。ドイツの国民経済と世界市場。ドイツの労働運動の歴史をイギリス，フランスの労働運動と結合させて。

イ. 公民

公民の場合も，中心は現代国家である。主要な外国憲法を比較考察しながら，ドイツとプロイセンの憲法の重要性を掘り下げて扱うこと。授業で

は包括的な問題を取り出し、歴史発展の中でこれがどう解決されたか、あるいはそれが現行法にどう影響しているかを明らかにする。この包括的問題と考えられるものは、たとえば——個人の自由、刑法の基本原則、市民権の個々の問題、人民と人民議会、執行権力との関係、個人の意志、人民の意志。各種の選挙形態。中央集権主義と連邦主義。自治と官僚行政。保守主義、自由主義、民主主義。社会主義と共産主義。国際法、国際間組織、国際連盟。哲学者、政治家、国民経済学者の政治経済理論の紹介をする際には、当該著作、演説、党綱領、宣言、新聞からの引用を十分に行なうこと。

（5）地理（下級2時間、上級2時間）

a. 第一年級下級

各国学習の最後にバルカン諸国、イタリア、中近東、極東とロシア、ロシアの各共和国、ドイツの隣国、ドイツ帝国についても触れておくこと。学年の全体課題に対応して、視点設定にあたっては公民科の課題を特に重視しなくてはならない。各国各民族がドイツとどのような関係をもっているかが前面に来なくてはならない。外国のドイツ人、ドイツ文化の他国への影響、ドイツの資本や工業、農業が世界の他の地域とどのような関係をもっているかについては十分に考慮を払う必要がある。

天体地理の中から精選された内容を扱う。最重要の経緯度図については、これの数学的根拠も含めて扱うこと。測量学の中からいくつか。

b. 第一年級上級

各国学習ならびにここで扱われる各問題に基づき、また生徒の数学・物理・化学的教養を動員しながら、地理学一般への体系的視野を育成すること。地球とその運動全体。地上の空気、水、岩石の物理化学特性。生物——人間を含めての——の居住、栄養空間としての地球。物質とエネルギーの相互作用、相補関係。有機世界、無機世界の歴史地理的展開。文化生活、国家生活の今日見られる段階。先史時代、文明時代の事実の比較。数世紀間の展開の中における世界像の変遷。人間の意識を、一方の極である因果

関係の連鎖の中に見出すこと、他方、生きた存在物の自由な選択に基づく目標や方向の中に見出すこと。地理的問題を他の文化科諸科、中でも哲学と関連させて倫理的世界観的に意義づけること。

Ⅱ 外国語

A. 第六年級から始まる第一外国語

一 序言〔目標〕

9年間の学科課程からなる第一外国語教育では、最も重要かつ適切な著作物を掘り下げて学習することによって満遍なくしっかりした言語知識を獲得し、外国民族の文化への導入を行なうよう努力するものとする。文化科諸科とも相互に関連させながら、外国文化がドイツ文化にどのような役割を果たしたか、また反対にドイツ文化が外国文化にどのような影響を及ぼしたかについて解明してゆくものとする。

生徒にはつねに語彙、文章構造、文体を母国語と比較させ、外国語のしくみの典型特性を把握させることにより言語現象の本質が深く理解できるようにすること、また、一定程度の口頭・文章表現能力ができるよう多面的に訓練を行ない、これを実現すること、このようにして獲得した言語能力、一般的言語認識を生徒らが鍛えみずから伸ばしていけること、また他の言語も独力で学習し外国民族の精神を理解することを通して現代史に人間として関われるようにすることが必要である。それゆえ読物は、言語を通して獲得された外国の特性についての知識が、その民族の一般的文化運動に全体として関わりながらある程度完成される、という視点の下に選択されなくてはならない。つまり読物は、様々な領域において一定の基本特徴といえるものに深く分け入り、これを究明することを通して文学、造形芸術、政治、経済社会発展、哲学、宗教——の中に表れた文化的生活現象の全体像に配慮するというのが基本である。このとき、文化科諸科においても同様であるが、万遺漏なくすべてにわたって問題にするということは放棄されなくてはならない。授業ではイギリス、アメリカ、フランスにつ

いて、着々と発展して今日の状態を築き今なお作用している力はいったい何なのかを鋭くつかみながらこれらの国の現在の姿をとらえるよう努めること、ドイツの文化発展に影響を与えた他民族の時代ならびに作品に特に配慮することが必要である。

二 教育方法上の原則

外国語と文化科とを緊密に関連させる際、不可欠のことは、教材選択と教材配分に最大限配慮することである。そのことは本来の言語教育はもちろん、読物およびこれを通して育てられるであろう認識についても同様である。

1. 発音

慣用句発音練習の際、最もよいのは、教師の根気強い正確な模範発音に倣って個人、グループ、学級全体でこれを言うことである。その際音声学が、教師には特に有効で生徒にも実践的な手助けとなって、音を正確に発音できるようになるであろう。殊に地方の言葉遣いが強固に通用しているところ——たとえば有声音と無声音の区別がないというような——では、正確な教育と訓練が必要である。また同様に注意すべきなのは、ドイツ語には一般に存在しない音の場合——たとえばフランス語の鼻音、英語の th——や、高地ドイツ語に存在しない音——英語の r, l——、さらに低声入声、リエゾン等々である。正しい発音とともに正しい語調も、交互朗読、自由会話の中でぜひとも教えられるべきである。

ここで要求される練習の多く——特にフランス語でよくみられる簡潔な発音——は、ドイツ語の発音にとっても有用であろう。

発音と並んで、歴史的に成立した綴り方にも習熟させることが必要である。

2. 会話練習

会話練習は言語学習の全体に役立つものである。それはまず第一に生徒の直観世界、イメージ世界のつながり、多様な生活領域を覆い、かつまたごく簡単な抽象思考に橋渡しするものだからである。それはさらに進んで、読物に基づきドイツ文化を外国文化と比較するというところまで導くものだからである。最上級で読物によって外国文化に取り組み、これを深め広げることができれば、自然に抽象思考の世界に入りこんで学ぶ練習となる。ただし、それに没頭するあまり明瞭な思想内容、完成された全体の思想内容が損なわれることがあってはならないが。

会話練習で何よりも心がけるべきは、できるだけ豊かな語彙を確実に獲得させること、それも生きたものとして身につけさせることである。はじめ数年間の教科書では基本的な語や言い回しがしっかりと教えられ、これらが確実に、いつでも使用可能な語彙体系に組み込まれていかななくてはならない。上級学年になりあらゆる方面の語彙が獲得されるようになると、会話練習での課題は、生徒にこの豊かな語彙からある部分を取り出していつでも使える状態にしておく、というものになる。

3. 講読

外国語教育の最重要部分たる講読では、できるだけ当該学年の文化科の課題と内容的に関連をもたせることが必要である。そうして外国の文化生活や、それに関連するものの生きたイメージを育てることに努めるものとする。それゆえ扱うべきものとしては——シェークスピア、シャフツベリー等々。フランス中世、フランス古典主義、19世紀の各種潮流。あらゆる種類の学術的散文、特に価値の高い歴史的文化史的著述。これらを好む生徒には、さらに哲学者の作品の代表的な部分——これらのものでもって「芸術的」作品の講読が補完されなくてはならない。これらすべてのところで外国民族の特殊性がドイツ民族と対比される必要がある。作品の全体あるいは比較的大きな作品の独立部分を関連文献として講読するときには、できるだけ早く始めること。具体的には第六年級から始まる第一外国語の場合、第三年級もしくは第四年級から、第二外国語の場合進度の早い生徒では遅くともその言語を始めて二年目〔第二年級上級〕には核心に入るも

のとする。

文学史は体系的である必要はなく、完結した作品あるいは比較的大きな作品の幾章かを講読することと関連して行なえばよい。重要なのは、その作品が作家の全作品とどう関係するか、時代の精神生活の中でどのような位置を占めているかである。それを論ずる際、時代の特徴がいま一度文学全体、文化全体の発展の中でとらえ返される必要がある。同様のやり方で、歴史的内容を備えた文献と結合して歴史に目を向けさせることとする。完結した作品の講読を通して獲得したイメージを補うために、すぐれた詞華集の中からサンプルを選びだすこともよいであろう。同様に、適当な翻訳書を個人で読みながら外国文学理解を深めることもよい。

4. 文法

文法の基本概念はドイツ語の教師と合意した統一的表示法に基づき、母国語を尊重しながら説明、理解がなされなくてはならない。文法は外国語の表現様式の本質をしっかりと確認、解明して外国語と母国語の違いを明らかにすることが必要である。断じてそれが翻訳規則の提示であってはならない。

文法は帰納的に学習することを原則とする。したがって、すでに知られた言語教材に基づいて学習するものとする。出来上がった規則を学びとらせるというのは価値のないことである。十分な数の個別事例をあらかじめ知ったのちに初めて、文法規則の提示は開始されなくてはならない。共同学習の中で生徒は個別なものから一般へ達し、そうして個別諸現象の基礎にある原理が明らかにされる——というやり方が望まれるのである。そこで重要なものはたとえば接続法や不定詞の規則を暗記学習させるのではなく、外国の表現様式を不断に観察させながら、今扱っていることばの態はなにか、このことばの形はどんな表現目的にかなうのか——について確かな感覚と明瞭な意識を育てていくことである。外国語文法の教育は、基本的にドイツ語教育の応用である。

フランス語で音韻法則が現代語から演繹される、あるいは英語で近親のドイツ語との共通性が解明される場合には、音韻史への理解が促されてよ

い。ただしこの場合、生徒に言語史の知識を過度に要求することがあってはならない。また、機会があれば教師は、構文法上の現象を心理学的に解明することを放棄しないようにすべきである。しかしながら、何が何でも説明しようとすることは理解どころか混乱に導くだけである。簡明な説明が見つけれない場合内包、外延から規則をきちんと定式化していくことでよい。

5. 書き方練習

書き方練習は、特に最初の数年間は厳密に読本に基づいて行なわなくてはならない。その内容は、聴き取り、文法や文体論に即した書き換え、読んだものの自由な表現、そして最後に外国語の翻訳——とする。よい文例に即して継続的、多面的に学習して得たもの、これを通してはじめて生徒は、外国語を自律的に使用することができるようになるのである。特別の翻訳練習帳は不要である。書き方練習は、学級内で教師と生徒の生き生きとした口頭での表現練習、そして読み上げられたものに即した練習でよい。のちに体系的な翻訳練習が求められるときでも、きちんと用意された教材が一番よいとするのではなく、ドイツ語のオリジナルな文献を用いることとする。その場合簡単なドイツ語教科書の翻訳を行なうことが目標となってよい。その他に自由な目標設定、たとえば論文作成やドイツ語講読のとき扱われた内容をドイツ語から移しかえるなど——がなされてよい。

二 教育課題

教育課題は3段階（下級、中級、上級）に区分けされる。当該学年で教材をどう配分するかは、その学校独自の学科課程に任されるものとする。

1. 英語

(1) 下級：第六年級から第四年級まで（各6時間）

①音声学

耳の訓練と音声練習。読み方，話し方練習。詩の暗記練習，簡単な散文の朗読，小会話。合唱，リート。語のアクセント，文のアクセントを観察しながら読むこと。

②語彙

語彙の習得については，まず第一に幼児の環境世界にかかわるもの，次いでもっと広範囲（家，家族，町など）のごく単純なことから，そして町や村の職業活動と生活およびこれに類するものへと関連づけながら行なうことが必要である。

③文法

態は構文法に基づき，いつも実際に使用練習を行ないながら記憶させること。また，たとえば代名詞などは，つねに動詞と結びつけて学ばせるように。意味や関連することがらなどについては，早くのうちから注意していくこと。

④書き方練習

正書法，書き取り，書き換え練習。散文小篇を自分の言葉で再現すること，ドイツ語からの翻訳を行なうことにより，授業で学んだ知識を強化すること。

⑤読書教材

童話，物語，博物誌，基本的な英国史。第四年級になったら直ぐに，関連のある作品に入ることとする。

(2) 中級：第三年級下級，第三年級上級（各5時間）， 第二年級下級（4（3）時間）

①語彙

語彙は，低学年で習ったものを規則正しく会話訓練で強化し，持続的に

くり返すことによって拡大するものとする。経済状況、旅行報告、また各種様式の手紙——この中にはいくつかの商用書簡も入る——は、十分に勉強されなくてはならない。なぜなら、多くの生徒は第二年級上級進級後中等学校を去り、職業に就くからである。

②文法

構文法——文体論へ進むものとする。同義語研究のいくつか。ドイツ語との共通性にも触れておくこと。

③講読

歴史、地理的内容をもつ19世紀イギリスの散文。これは、イギリスの実際の状況を解明しながら扱うものとする。指導的人物の伝記。エッセイ——そして小説へ進むものとする。物語詩（バラッド）と代表的芸術詩。喜劇、歴史戯曲あるいは分かりやすいシェークスピアの悲劇。第二年級下級になって初めて、現代イギリスの文化像の総括。これは下級、中級の全教材を通して行なうものとする。

(3) 上級：第二年級上級から第一年級上級まで（各4時間）

①文法

表現についての幅広い検討。古代の会話双対文に関する援助なしに可能ならば、表現についての歴史・心理的掘り下げを。実践的な文体論（簡単なエッセイ）。

②講読

シェークスピアの荘厳劇。思想豊かな芸術詩の中から現代までのものを取り出して吟味すること。社会問題を扱った小説や演劇（ゴールズワージー、ショウ）、論難書（バーク、カーライル、ラスキン）。イギリスの世界帝国成立に関して内容ゆたかな歴史・紀行作品を扱うこと（シーリー、フルード）。シェークスピアの文学史的位置、彼の演劇、彼の先駆者達、のちへの影響、ドイツへの影響。ディケンズ、サッカレー、長編小説の発展、

J. S. ミルの思想過程，ラファエル前派，等々。またこれらのドイツの精神生活との関連。今日の英国の全体像を描いた試論。アメリカ史から若干。特にエマーソン，カーネギー，ミュンスターバーグには格別の注意が必要である。

2. フランス語

（1）下級：第六年級から第四年級まで（各6時間）

音声学，語彙，読書教材，文法，書き方練習にあたっては，英語で示した指示に準じる。

（2）中級：第三年級下級，第三年級上級（各5時間）， 第二年級下級（4（3）時間）

①語彙

中級での英語に同じ。

②文法

構文法と結びつけて形態論の強化，拡大，深化。

③講読

第一に，比較的簡単な物語や歴史的 content の散文の講読。物語としてはたとえばドーデの『ちび公』，またドーデ，マルグリット，トゥリエ，ポール・アレヌ，テッパールの小説。歴史ものとしてはたとえばラヴィスの『フランス史物語』やド・オーブルとモノの『伝記』，モノの『ドイツとフランス』，ミシュレのものなど。さらに年齢がすすめばもっと難しい散文を。詩の文献としては主にラ・フォンテーヌの『寓話』や19世紀の叙事詩を戯曲のときに（第二年級下級）——たとえばサンドーの『セグリエルの娘』やオジェの『試金石』など——。

(3) 上級：第二年級下級から第一年級上級まで（各4時間）①文法

生徒が語形論，構文法を再度，深化，拡大する場合，フランス語の基本法則を一わたりしてこれを確認しておくべきである。フランス語とドイツ語の文体の違いについては，自分で観察できるよう指導しながら理解を深めること。

②講読

17世紀のものの中で古典時代のフランス演劇の幾編かは，ドイツの文学発達（たとえばレッシング）を理解するうえでも欠くことはできない。さらにパスカル，ラ・ロシュフコー，ラ・ブリュイエール，ボシュエからの抜粋。セヴィニエ夫人の『書簡』の幾つかとラ・フォンテーヌのお伽話。これらはどの学年にも適するものであろう。

18世紀のものとして，少なくともモンテスキュー，ヴォルテール，ルソーの抜粋，あるいはアンソロジーを用いてこれらの考察に及ぶこと。

講読の中心は19, 20世紀の主要作品にあるので，時代の精神発達の様相に合わせて選択する必要がある。そのため何よりも，相互に現われた各種潮流の最重要詩作品とともに，バルザックからアナトール・フランス，ロマン・ロランといった19世紀の大作家のものをいくつか読むこと。また，これがドイツ，ヨーロッパ文学の発達にどう影響したかも示す必要がある。歴史哲学の作家として考察すべきなのはたとえば，テーヌ，オラル，アノトー，トックヴィル等々。文化史的作品としてはたとえばゴンクール兄弟，セニョボス等のものを。推薦すべきものとしてさらに，重要な歴史書の相当大的い独立の章節を集成したもの，また，文学史概観を補うものとして良質なアンソロジーからの抜粋たとえば，シャトーブリアン，スタール夫人，ジョルジュ・サンド，ユゴー，ギゾー，ミシュレ，サント・ブーヴ，ルナンといった作家を含めて。哲学に天分のあるクラスの場合，ジュフロア，クーザン等の作品の一部を，政治問題に関心のある生徒の場合，たとえばクリエのパンフレットを読ませるなどしてもよい。

叙情詩では生徒に，各種の潮流から成るロマン主義の時代（ラマル

ティーヌ，ヴィニー，ユゴー），高踏派の時代（ルコント・ド・リール，エレディア，シュリー・プリュトム，ボードレール）をきちんと理解させること。また，現代詩人（ヴェルレーヌ，ヴェルハーレン等）については，作品を吟味しながらドイツ詩との関係を理解させなくてはならない。

以上に列挙したものは例にすぎない。適切な作品がきわめて豊かにあるのだから，教師は生徒の好みや能力を考え合わせ，自由にそれらを選択し用いてよいのである。

B. 第二外国語

一 序言〔目標および方法〕

〔1. 第二外国語教育の課題〕

第二外国語教育では生徒に言語知識を習得させ，彼らが重要文献に立ち向かい，やがては独力で学ぶ力を身につけさせることが課題である。

（1）〔目標〕

重要作品を具体的に説明するときは，自然に当の民族の精神生活，文化生活に分け入ること。また，ドイツ高等学校の全体課題に対応させてドイツ文化を理解するとき，この外国文化がどのように役立つかを明らかにすることも必要である。

（2）〔方法〕

第六年級から始まる第一外国語のところで述べた教育方法に関する覚え書きを，2近代外国語にも同じ意味合いにおいて適用する。特に，ドイツ語教育のところにおかれた基本原則を適用することとする。

2. 第二外国語としてのフランス語，英語

フランス語あるいは英語が第二外国語としてわずか 4 年の学科課程しか持たないのであるから、第一外国語で獲得された全能力（たとえば発音）、全知識（たとえば一般文法）を動員して、初めの 2 年間は発音の正確さのみならず構文法と結びつけて正確な形態論をも習得するようにしなくてはならない。二年目〔第二年級上級〕になればもうほとんど簡単な作品の講読が中心である。文法は帰納法的やり方でかつ可能なかぎり講読文献から抜き出した事例を用いて教えるものとし、これに特別に週 1 時間充てるものとする。次いで三年目、四年目では第六年級から始まる第一外国語で挙げた最重要著作を扱うものとする。

二 〔教育課題〕

1. フランス語

（1）第二年級下級（5 時間）

①音声学

音韻学の基本成果を取り入れて読み方、会話の練習。

②文法

人称代名詞と関係した現在使われている活用法。その他の形態論で主要なもの、とり分け代名詞。

③語彙

講読や観察の中から学びとること。

④書き方練習

聴き取り、模写、翻訳。

（2）第二年級上級（4 時間）

①文法

音韻法則に配慮しかつ名詞における似たような現象とも結びつけて古文体の活用法。形態論とり分け態と時制について。

②講読

主として歴史的 content の散文の講読。

③書き方練習

聴き取りと簡単な自由表現。

（3）第一年級下級，第一年級上級（各3時間）

①文法

構文法の深化，拡大。

②講読

19世紀の小説，戯曲，物語関係の中から特にすぐれた作品を。古典悲劇。モリエールの喜劇。18世紀の詩数例，19世紀の詩。特にドイツとの精神的，政治的関係を究明しなくてはならない。これを扱うについては講読教材がそのきっかけとなる必要がある。

③書き方練習

短いドイツの作品を自由にフランス語に移しかえること。

2. 英語

（1）第二年級下級（4（5）時間）

①音声学

簡単な会話と結びつけること。

②文法

基本的な形態論，文章論。

③語彙

会話教育語彙，簡単な日常会話語彙。

④講読

旅行記，物語。

⑤書き方練習

第六年級から始まる外国語教育開始時に同じ。

(2) 第二年級上級 (3 (4) 時間)

①文法

形態論の仕上げ。構文法。

②書き方教育

歴史的 content のものの講読。散文で書かれた戯曲。バラッド。

(3) 第一年級下級 (3 (4) 時間)

①文法

構文法から文体論へ進むこと。

②講読

シェークスピアの喜劇——時代解説も含めて——。歴史散文。『アイバン
ホー』『クリスマス・キャロル』『シラス・マリナー』などの小説。

(4) 第一年級上級 (3 (4) 時間)

①文法

今までのことをくり返して深化，拡大をはかること。文体練習（簡単なエッセイ）。

②講読

シェークスピアの悲劇一作。講読とともに19世紀のイギリス内外の歴史を考察できる適切な著作。

3. ラテン語

〔(一) 目標および方法〕

(1) 〔目標〕

ラテン語教育では基本文法の確実な知識を基礎に，ラテン語で書かれた簡単な文学作品が理解できることを目指すものとする。この目的に適うように教科書，読本を基礎とし，ラテン文献の小さなものを吟味してみる，あるいはまた比較的大きな作品の関連章節を吟味することとする。次々と作品を選択する余地を最大限認め，さし当たりほぼ同時代の作品，同様の表現形式の作品に即してラテン語を習得する機会を与えなくてはならない。

(2) 〔方法〕

①文法，語彙，書き方練習

文法教育は初めから目標をラテン語からの翻訳に置いており，したがって最頻出のものならびにラテン語に特徴的なものに限ることとする。生徒にしっかり覚えさせるべきものと，講読しているものの理解のためにたまたま行なわれる説明とははっきり区別することが必要である。文法教育の方法としては，第六年級から始まる第一外国語で述べられた方法原則が適用されるものとする。生徒の年齢が上がりラテン語教育の中で十分に力を

身につけたならば、生徒は授業の中で自分たちの繰るその言語の中にローマの精神が独特の法則で息づいていることを悟り、言語現象の湧き出る源たる精神の運動というものを解明することができるようになるであろう。特に優秀な生徒の場合、このやり方で個別作家のことばの特徴あるいは全時代状況を観察させることが可能である。適切な語彙を心に刻みこむことを計画的に行なわなくてはならない。計画に沿って行なわれる語彙教育以外の語彙拡大は、第一には教師の、しかしやがては生徒が自分で成し遂げるべき課題である。ラテン語の基本要素、中でも形態論はまずもって文をラテン語に置きかえる訓練の中で学ばなくてはいけない。またある外国語の断章の形を確定したり文形式を理解させるということも勧められてよい。やがてテキストから翻訳に移行する際、この目的のもとに個々の文や言い回しの文法的分類をする、あるいは厳密な態の確定を行なうことも奨励すべきである。このような下練習をして初めて、自由な表現練習をして差支えないといえる。書き方練習はこの教育過程にそって行なわなければならない。

②講読

講読文献の選択をする場合、多様な年次の生徒の能力性向に配慮しないてはいけない。読本から章節を選びだす場合それ自体で完結したものとし、またその作業を通して作品の概観をするものとする。ドイツ語のよい翻訳は、大部な作品の概観をするためのものであって、読んでいる作品の中身をこれによって生徒に分かせたり、読んでいる箇所では各種の翻訳の仕方を対比させて生徒の言語感受力を磨ぎすすめるためのものではない。個人読書は文化科でと同じように奨励されてよい。

一どきに沢山の作家のものを読む必要はない。文法説明は、テキストを理解するのに不可欠なものに限定する。作品の一節は、授業でまず教師の指導の下に翻訳がされ、次いでこれに倣って生徒の翻訳がなされるものとする。第一年級になると、ともかくも各章節を自分で規則正しく予習することを宿題に課すものとする。生徒には言語大辞典の使用法も教える必要がある。次々と移り変わる講読目的に正しく対応する授業とは、一方で細部にわたる説明や見事な翻訳も試みてみるし、他方幾つか典型的な箇所を

引いて内容補足を自由に行なうといった、幾段階かのレベルを備えた授業のことである。教室で作り上げる翻訳文は、このいくつかの可能性に適うものである。

〔(二) 教育課題〕

(1) 第二年級下級（5（4）時間）

規則的形態論、非規則的形態論のいくつかを読本あるいは学習教材から引き出すこと。読本あるいは学習教材によって最重要の構文例を観察すること。また語彙については種類、範囲を十分注意して選択し、これを習得させるものとする。

読本あるいは学習教材では、いわゆる古典純粋ラテン語による散文作家の語彙を用いるものとする。また、できるだけ早くオリジナルの文献を用いるものとする。もし上記授業で可能ならば、適当な散文作家の一節、たとえば古代ドイツ史にとって重要なカエサルの『ガリア戦記』などを取り入れてよい。

語彙練習をする際、語源学との関係、特に今まで習った第六年級から始まる第一外国語や母国語との関係に注意してすすめること。最初からよい発音に心がけることはきわめて大事なことである。このため教師の模範や意味にかなった読みをくり返すことが大変重要になってくる。

おおよそ3週間に1回の割りで書き方練習。

(2) 第二年級上級（3時間）

①文法

第二年級下級の教材をくり返して完璧にすること。非規則的形態論、特に動詞の中で最重要のものを心に刻みこむこと。構文法知識、中でも複合文についての知識を拡げること。本来の従属格概念、間接話法。語彙を系統的に拡大してゆくこと。

②講読

カエサル『ガリア戦記』より抜粋。他の古代散文作家の章節。たとえばキケロ（『ラエリウス』など）、さらにヴァレリウス・マクスィムスやタキトゥス（『ゲルマニア』1－27巻）、オウィディウス。3，4週間に1回の割りで書き方練習。

（3）第一年級下級，第一年級上級（週3時間）

①文法

必要に応じ、かつ講読と関連させること。基本文法のくり返しと深化。講読の際観察した構文法、さらに簡単な文体論に関するものを総括的に扱うこと。語彙の定着、拡大。意味の変化を観察させること、個々の単語や言語現象の変化（借用語、外国語）を観察させること。

②講読

適当なラテン散文作家のものに加えて、後期ラテン語あるいは中世ラテン語で書かれた文学作品の吟味。その場合特に文体論や韻律法の美しさには何よりも注目するものとする。

推薦すべきものとしてたとえばカエサルの『内乱記』、サルスティウスのもの、キケロ（『法律について』『共和国について』）、スエトニウス（特に『皇帝伝』）、『アンキラ記録』、セネカのもの、プリニウス（『書簡集』）、タキトゥスのもの——いずれも部分。

オウィディウス、カトゥルス、ティブルス、ホラチウスの作品、そしてフェイドロスの作品も。

後の文献として挙げるべきは、たとえばミヌキウス、フェーリクス、アウグスチヌス（『告白録』あるいはまた『神国論』）、トマス・モア（『ユートピア』）など。アインハルトの『カール大帝伝』、そしてその他のラテン語で書かれたドイツ文学、さらに吟遊詩人の詩の吟味も。

4，5週に1回はラテン語作品の翻訳。

Ⅲ 数学・自然科学

1. 数学

一 序言〔目標および方法〕

（1）一般的教育目標

数学では正確かつ迅速に既知数の計算ができること、また暗算や市民生活でこの能力を応用できることがとり分け重要な教育目標となる。量の正確な把握、比較に習熟すること。生徒にしっかりした数理認識を育て獲得させることによって、数学というものが秩序をもち、それ自身の中で積み重ねられかつ他の多くの知識や実際生活にとっても意義のある学問であるということを理解させることが必要である。周辺の事物や現象の形、大きさ、数量を数学的に認識する力を育て、獲得した力を自分で応用できるようにさせること、とり分け体積直観能力や可変量の相関関係を数学的に捉える力を伸ばすことに心がけるものとする。論理的推論、証明力の育成、哲学的内容、数学の精神史的意義についてもある程度理解させるものとする。

（2）教育方法上の原則

a. 一般原則

①〔学習原則〕

明瞭な理解に基づいた数学的知識は、解釈・定理・法則そして何よりも証明の暗記学習といったものを根本的に放棄して、生徒の理解力に適合させ作業教育の精神で生徒の自己活動を通して獲得されなければならない。それゆえ、従来用いられていた教材は、個別の学問分野を徹底的に学び尽くすために精選することが必要である。定理と方式も、それが内容的に関連があり実際応用面でも価値があるとされたときにのみ尊重されることと

する。しかし必要最小限に精選した暗記素材はくり返し反復して確かなものにしなければいけない。

② [自主的思考訓練]

教材をマスターするための最重要手段である問題解法の場合、数学的思考を育てるようにする必要がある。特にこれによって生徒が幾何学や代数学の命題に接近するような場合、推論、証明能力が育てられると共に、ますます自主的な思考訓練が要求されるべきである。

③ [生活接近]

応用問題では実生活理解に役立つことが必要である。それゆえ応用問題では他の科目や生徒の周囲に注目し、これを通して具体的教育、とり分け他の科目と目的に応じた分業を行ないながら経済生活に関する教育を行なうことも必要である。しかしこれによって本来の数学教育が疎かにされてはならない。

④ [批判的考察]

問題にきちんと取り組むために、予めザッと計算をしたり図示してみることを通して、あるいは解法や解の数を議論することを通して、さらに完璧な解かどうか確かめてみることを通して生徒に批判的考察態度を育てる必要がある。

⑤ [測定値]

中級ですでに数というものの精確さの限界を学びとる——これは測定値に関係する——のであるが、この知見は、上級ではあらゆる場合に当てはまる究極的な数の考え方である測定値へと拡大するものとする。

⑥ [表現法]

言葉できちんと表現すること、ならびに明瞭簡潔な叙述には全段階で特に配慮しなければならない。

⑦ [数学史]

可能であれば数学史を，教材展開や問題提出に応じて教えてよい。その場合生徒には，一般文化史との関連をできるだけ自覚化させるものとする。加えて上級生には，数学史上重要な人物の作品を読むことも奨励されてよい。

b. 算数

① [目標]

算数教育の目標は，既知数の計算を正確かつよどみなく行なえることのみならず，何よりも数値の意味を理解する力を育てることにもある。数計算力をつけるために幾何や算数の授業中ずっと，口頭算，筆算が行なわれる必要がある。暗算については全段階で，一定程度特別に時間を充てて配慮すべきである。

② [約分計算]

約分計算はおおよそ第四年級から。最もよいのは測定値と結びつけて，あまりにも極端な精確さは無意味であることを悟らせることである。

③ [数の視覚化]

すでに最下級学年から，できるだけ距離や面積を一目で分かるような数量関係に置き換えていくこと。独立数の図示につづいて凡そ第五年級から，数列を幾何的に図示してみる。このように視覚的に表現しその意味を理解することに大きな価値を置くべきである。なぜなら視覚化は，やがて日常経験関数をグラフで表現することに役立ち，それはまた，分析的学問的諸関数をグラフ処理することの入口となるだろうからである。

c. 数学，代数，解析

① [代数]

下級の算数教育で時々簡単な文字代数式による数列規則が概説され，算

数教育で得た知識が学問的にまとめられたのち、次第に具体数は文字に、帰納的証明法は演繹的証明法に置き換えられるものとする。

② [関数]

関数の考え方——はじめは視覚の枠内のものだったが——を授業の進行の中で次第に厳密なものにし、上級では数学の普通の形で扱うものとする。第三年級上級では実際例に即したグラフ表現の基本的考え方が教えられるものとする。この終わりには、生徒は経験関数の最重要の特性（連続、傾き、面積）について完全に認識できているものとする。しかしこの場合、「未知数・方程式」概念と「変数・関数」概念の間にはっきりした区別をしておくことが必要である。また、直角座標にグラフ表示することは、未知数が数個の一次方程式が終わって初めて認められるものとする。全段階、殊に中級でグラフ表示を利用する際注意すべきことは、グラフに表すことが自己目的ではなく関数のうごきを見とおす一手段にすぎぬということ、またそれとともに表にあらわすこともそれと同等の価値をもつもう一つの手段であることを忘れてはならぬ、ということである。

③ [微分, 積分]

上級では生徒に微分、積分を教える。その際授業は、学問的厳格さを求める当然の要求と、実際生活上の要求に配慮するという当然の要求との間をゆくものとし、幾何学的に視覚化することも補助手段として十分なされてよい。

d. 幾何学

① [図形]

簡単な立体観察から始まる予備学習では、生徒の観察能力を高め、幾何的抽象能力を育て、空間図形を正しく書けるようにし、対象の目測、実測、描写能力を鍛え、コンパス、定規の初めての使用訓練を行なうものとする。

② [論証]

この授業は幾何学の系統的構成に気付かせ、幾何的観察を幾何学的認識に導くものとする。これを通してこの授業は、日常経験的観察を論理的演繹的観察方法へ高め、生徒に証明してみたいという欲求を育てるものとする。

③ [図形の移動]

下級学年からすでに平面図形、立体図形の移動を十分訓練し、ある図形の各部を変化させると他の図形の大きさにどう影響するかを確認させること。さらに、線対称点対称、幾何図形の回転、移動、折りたたみに特に配慮するものとする。

④ [具体物の援用]

実生活の中から適切な視覚実例を援用することによって、平面幾何の考察の場合にも空間の相関関係をできるだけ生き生きと捉えることができるであろう。

⑤ [直観物の応用]

形を正確かつ細心に描く際にも、直観物を利用することが重要である。また平行線や色彩を用いながら直観物を利用することにも特に注意することが必要である。模型を利用することは空間観察能力の習得を妨げるものではない。なぜなら空間直観能力は次第に空間表象能力に発展するものだからである。

⑥ [実生活との関連]

幾何の知識、中でも問題を出す場合には実生活と関連づけ、これを応用させることが必要である。

⑦ [作図]

特に注意すべき幾何作図の場合、補助手段として専門記号が導入され、略図も教えられなくてはならない。ときには難しい位置関係問題も扱われてよい。いわゆる解析は、何よりも思考過程に基づいて考察されるべきで

あり、これを通して解に向かうようにする必要がある。十分習熟した生徒には、色々な作図方法を批判的に考察させてみるものとする。奇異な見本から取られた製作図はすべて遠ざけるものとする。

⑧ [三角法, 小数計算]

測角術, 三角法はごく単純な幾何図形ならびに基本的な平面三角, 球面三角定理に限定する。測角術を利用した作図法を学んだのちに, まず簡約小数計算の諸方法に基づいて意義が説明され, 計算が多面的に訓練される必要がある。

⑨ [立体幾何]

立体幾何は先ずもって純粹視覚的に行なわれる導入授業で, 計算と作図とが一緒にすすめられ, その後, 初めて漸次計画的学問的教育法——それは最重要命題のみに精選して基本概念や命題を具体的形態に仕上げたものである——に入っていくものとする。

⑩ [総合的認識]

すでに最下級学年から, 幾何作図は幾何学の授業と密接に関連させて生徒に幾何の事実をはっきり示し, その現実生活への応用を教えて, 生徒に漸次空間観察・空間表象・空間描写三者の密接な関係についての, より一層明確な自覚を育てていくものとする。

⑪ [測定]

同様に測定の指導は初めから重視する必要がある。その際精密な補助道具による測定の精確性を次第に高めること。こうして終には測地学, 天文学上の測定を完璧精確に行なうことがどれほど困難なものであるかということも認識させてゆくものとする。

二 教育課題

(1) 第六年級 (4時間)

整数の無明数，割り切れない明数，倍数明数の四則計算。ドイツの度量法，重さ，貨幣。小数の書き方と最も基本的な小数計算の練習。これらの家計や地域生活への応用。立体の観察——ただしこれらが同学年の地理，博物で扱われる限りにおいて——。

（2）第五年級（4時間）

明数の小数計算練習の続き。常分数の四則計算。線分や面を用いての数の視覚化。一致あるいは共通量から推論して，ごく簡単な比例算問題解法。これらの地域財政，国家財政への応用。立体観察の深化。

（3）第四年級（4時間）

①算数

小数を用いての四則計算。常分数から小数への置き換えとその逆。約分計算。百分率，割引，利子の最基本例。および単純比例算，複合比例算を応用して市民生活上のその他の問題を解いてみる。線分や面を用いての数列の視覚化。図表を提示してこれによる算数計算。特に平均値や比例関係を。地域財政，州財政，国家財政への応用。

②幾何学

幾何学の基本概念を視覚的に広げていくこと。直線，角，三角形に関する理論。

③幾何作図，測定

線分，円弧を組み合わせた作図。線分，角の測定。

（4）第三年級下級（4時間）

①数学

代数計算への導入。絶対数・相対数，整数・分数の四則計算。提示され

た代数式に基づき図表の計算。有理数の範囲内での運算計算と関連して簡単な一元一次方程式。比例。これ以前の学年で出された数値計算練習を経済問題に関連させて。

②幾何学

四角形の理論。特に平行四辺形、台形。円の理論の基礎（円の弦と角）。

③幾何作図、測定

精確、精密に作図できるように練習を重ねること。線分と角の測定。自由課題として目測練習も。

（5）第三年級上級（4時間）

①数学

一元および複次元一次方程式。簡単な応用特に実生活上の。日常経験関数を手書きでグラフに記す練習。一次関数の表示ならびに関数を用いた解法にこれを応用すること。整数指数の冪乗。 $y=x^n$ 関数の n 次根の解のうち正整数解を図示すること。

②幾何学

円の理論の発展。面積計算と比較（ピタゴラスの定理）。

③幾何作図、測定

数学と結びつけて曲線作図。方眼紙の助けを借りて図形による面積算出ならびにその他の処理。線分、角、面積測定。これは自由課題でよい。

（6）第二年級下級（4時間）

①数学

冪乗理論と解（ $y=x^n$ と $y=n\sqrt[n]{x}$ 関数のグラフ表示とともに）。根号算の計算。具体例での計算練習の継続。一元二次方程式、 $y=x^2+ax+b$ 関

数。

②幾何学

線分の比に基づく一致，近似値理論。これの円への適用，調和点，半直線。ごく単純な立体の描写と求積。

③幾何作図，測定

数学と結びつけて曲線作図。近似作用（円）。精確計測（ノギスによる）。近似理論と結びつけて野外測定。立体図形の法則に基づく作図。

（7）第二年級上級（4時間）

①数学

指数関数と対数関数。対数表と計算尺。対数計算。簡単な二次代数関数。二次関数の助けを借りて解ける簡単な方程式ならびに方程式の考え方。経験的観察方法による円錐曲線。

②幾何学

三角関数。簡単な三角法の計算。測角学，周期関数の概念。空間の中での直線と平面。立体の求積ならびに作図の継続。

③幾何作図，測定

数学と結びつけて曲線作図。単純な立体を斜めから平行投射させて作図。また，略図，正面図作図。簡単な野外測定，水準測定練習。

（8）第一年級下級，第一年級上級（各4時間）

①数学

一次の等差級数，等比級数。複利計算，利子計算を経済生活から応用して。整数指数による二項定理。数学的確率。正整数から複素数までの数概念の広がり。授業で考察した有理数の整数，分数，代数，超越の各関数を

繰り返すこと。これらの関数を微積分処理しながら扱うこと（特に最大値、最小値）。方程式の近似解法。数の概念ならびに関数概念の発展に配慮すること。

②幾何学

球面三角法の基本概念（正弦定理，余弦定理）。数理地理・天体学への応用。座標幾何学。

これらのものを歴史的哲学的視点のもとに検討してみること。

③幾何作図，測定

円錐曲線理論に基づきこれを描いてみる。中心透視図法。球体表面の作図処理（経緯度線）。測定，計算練習も行いながら簡単な天体観察。

2. 物理

一 序言 [目標および方法]

(1) 一般的教育目標

物理の教育目標は、最重要の物理現象，法則ならびに人がこれらの法則に到達したプロセスを知ること，また，自然の総合的考察ならびに物理的世界像の獲得にとって基本的な諸理論に入りこむこと，そして物理学の技術的応用に知悉すること——但しそれらが日々の暮らしならびに国民経済関係に重要な役割を果たすという限りで——にある。

(2) 教育方法上の原則

① [観察・実験]

自然現象の観察から入ってゆく物理の授業では，できるだけ実習や生徒自身の実験，あるいは直接接している身近なものの観察に基づくものとする。時間不足のときは，生徒が家庭学習によってこの一種の研究作業の省

察をすることがができるように教育することが必要である。全学年の中心に位置づいている実験は、帰納的授業の場合は考察の一通過点をなすもの、演繹的授業の場合は考察の確認決着をなすものとする。

② [教材選択の視点]

物理で特に重要な教材選択という点については、準備教育段階では、環境世界を知るに必要な比較的簡単な自然現象に特に注目すべきである。上級段階で、生徒がそれ以外の物理知識分野に関して認識論的に完璧な観念をもっているとき、いくつかの教材分野についてはかなり簡単に扱ってもよい。重要なのは物理の個別知識を詰め込むことではなく、物理の研究方法に対してより基本的でかつ自分で考える目をもつことである。

③ [公式と物理]

物理法則を数学的公式にする際留意しなくてはならないことは、数学は物理にとって認識の一手段にすぎぬということである。物理では先ず何よりも数学的亜流的考察は避けなくてはならない。技巧に頼るうわべの証明に代わって、この種の証明ではなぜ根本的な証明になっていないかを明示しながら完璧な公式を定立する必要がある。

④ [物理像の形成]

物理のあらゆる段階で、展開された実験や考察に対して意味を与えている物理という多次元にわたる偉大な世界に関して、生徒に明瞭なイメージをもたせることが必要である。

⑤ [歴史的視点]

物理の授業でとり分け重要なのが、歴史的方法という視点である。というのもこれによって、数学自然科学教科と他教科との最も期待されている深い結びつきが確立できるのみならず、まさにこの歴史的議論を行なうことによって生徒を全生活分野の理解に導き彼らに個々の問題のより深い認識をもたらすのに最適な方法だと言いうるからである。これの大きな長所は、たとえば作業教育でこの歴史的立場をとることにより、かつてなされ

た発明発見を同じようにいま一度追体験させることができるという点である。歴史的考察法が絶対に必要なときというのは、たとえば第一年級でのように偉大な基本原理の議論にかかわるとき、あるいは世界を揺るがす大問題や思考方法につながるようなとき、である。物理の最重要理論を問題にする際には、生徒の精神世界を歴史的認識から哲学的認識の入口にまで遡らせることが必要である。そうしてここで第一年級の生徒たちに、物理的問題は結局形而上学の問題に合流するのだということを示さなくてはならない。重要な物理学仮説の歴史的転変を問題にして、生徒が自分たちの認識一般は何と限界に制約されているかということに深く感じ入ったなら、そのとき彼らは、大問題というものはすべて十分解明されたと素朴に思い込んだその瞬間にようやく端緒についたのだということを確認するようになるであろう。

二 教育課題

(1) 第三年級下級 (2 時間)

固体、液体、気体のしくみのうち基本的で簡単な諸現象を実験に基づいて取り扱うこと。また熱学については日常生活の観察、生徒による簡単な実験も行ないながら、実験に基づいて取り扱うものとする。

(2) 第三年級上級 (2 時間)

磁性、電流、音響学、光学の簡単で重要な諸現象を実験に基づいて取り扱うこと。

(3) 第二年級下級 [特定せず]

授業時間は定めない。これまで獲得した物理知識を、化学への導入（たとえば水、空気、食塩、石炭の性質についての議論）に役立つようにし、かつこれを完璧なものにすること。

（4）第二年級上級（2時間）

力学への最初の学問的導入（速度と加速度，落下と投擲，力と質量，仕事量とエネルギー，エネルギーの変形と保存）。熱力学（温度と膨張，熱量と比熱，気体の状態変化と流動，力学的熱等量，熱力学装置，大気圏の熱現象）。

（5）第一年級下級，第一年級上級（各2時間）

剛体力学（力の角度と引っぱり角度，回転モーメントと偶力，慣性モーメント，平衡条件，ニュートンの法則，円運動，調波，振り子，天体物理の最重要のもの）。流体力学，気体力学（アルキメデス，パスカル，トリチェリ，ベルヌーイ，ボイル，ラプラスの諸法則）。波動論（進行波動，定常波，ホイヘンスの原理）。音響学（音速，鳴奏弦と空気柱に関する理論）。磁性（クーロンの法則，磁場，磁界の強さ，力線，地球の磁性）。電流（クーロン，オーム，ジュール，ボルタ，キルヒホッフ，エールステッド，ビオ・サヴァール，ファラデー，アルヘニウス，マクスウェルの諸法則。電気の単位，直流機，交流機，三相電流機，変圧器，送電）。光学（光の性質に関する諸仮説，光学機器の理論と実際，干渉と屈折，光波・熱波・電磁波の関係，放射能，原子構造）。

3. 化学

一 序言〔目標および方法〕

（1）一般的教育目標

最重要の化学現象について知ること——ただし，それらが生物，非生物的自然を理解すること，あるいは国民経済にとって意義のあるというかぎりにおいて——。これらの現象の基礎にある法則に親しむこと，また，この法則性を理解することにつながる諸理論にも触れておくこと。最重要の

鉱物や岩石について、その技術的、経済的、地質学的意義を知ることも忘れてはならない。

(2) 教育方法上の注意

① [物理の方法の適用]

物理のための教育方法上の諸注意事項が化学にも同じ意味合いで適用されるものとする。

② [実地学習と授業]

生徒の実地学習はクラス授業と緊密に関係するものとする。これだけが独立して学習されるようなことがあってはならない。

③ [鉱物の取り扱い]

鉱物の中でこれまで発見されているものを扱う場合、その経済的価値、地質学的意義を評価しながら行なうことが必要である。結晶形態を扱う場合には、その幾何学的特徴が明らかにされなくてはならない。

④ [化学史]

化学史を簡単に考察する場合、最も適当な箇所では化学史発展の基本線を示すこと。また個々の事例に即して化学の重要知識の生成あるいは重要人物の活動を扱うものとする。

⑤ [見学旅行]

見学旅行では自然現象の理解を深め、大化学工業の重要性に気付かせ、化学が家計や国民の健康に大きな価値をもっていることを分らせるものとする。

⑥ [教材の精選]

教材選択の基本原則は、化学の授業の細々した末節部分を短縮あるいは完全に切り落として化学の本質の中でこれを行なうということである。授

業過程では化学万般に及ぶことは放棄して、最重要部分に基づいて化学研究の方法にこれまでよりもずっと深く注目していくものとする。教育方法上の配置としては、十分に学び終えた分野を次々と積み上げること、また、他の自然科学科目と近い分野を結びつけて行なうこととする。こうして自然の過程全体の偉大な関係をだんだんに自覚させるものとする。

二 教育課題

（１）第二年級下級（２時間）

用意すべき化学の教育課程としては次のもの——単純かつ重要な化学現象ならびに概念を実験に基づいて取り扱うこと（空気、水、硫酸、岩塩、石炭の特性。元素、混合物、化合、酸化、還元、親和性、酸、塩基、塩）。単純比率、倍数比率法則を確認すること。化学記号への導入。

（２）第二年級上級（動植物と合わせて３時間）

授業は同一教師だが、二つの科目に分けられる。要求があれば、指示しある週３時間を化学と生物に分けてもよい。通常は化学２時間、生物１時間に配分するものとする。

化学の教育方法的に適切な教育課程としては水素、酸素、硫黄、造塩元素、これと結びつけて分析、合成、置換、原子量、化合量、原子価の諸概念、が挙げられる。原子理論、アボガドロの仮説をしっかりと教えること。

（３）第一年級下級、第一年級上級（動植物と合わせて各３時間）

類金属とこれの最重要化合物について論じ合うこと。これと結びつけて最強酸、化石化した石炭、燃料ガスの技術。アルカリ金属とり分けこれからできる塩について、その地質学的工学的意義を教えること。その他の軽金属ならびに最重要の重金属。その精錬と工業技術については特に重視すること。元素周期系についても触れること。イオン理論、解離理論。工業

や経済生活、国民の栄養や健康にきわめて重要な有機化合物の合成ならびに特性。

4. 博物

一 序言 [目標および方法]

(1) 一般的教育目標

動植物の最重要生命過程、その構成ならびに体構造と生活様式の関係について知ること。生物の多様性、近縁関係、遠隔関係およびこれの変容についても一通り見ておくこと。動植物界の主要分類グループについて知っておくこと。有機体と環境との代謝関係、また同種・異種有機体間の代謝関係については特に自然の中の人間の位置、あるいはここから由来する国民経済の自然的基礎という点に注目しながら一通り見ておくことが必要である。地表の形状に応じて現われる地力についても知っておくこと。最重要の岩石、土質について知ること。主要な地質時代史について知っておくこと。博物が重大な世界的問題、生活的問題にどのような意義をもっているかを理解すること。

(2) 教育方法上の注意

① [観察]

生命諸現象について理解するという博物教育の主要目的が、すでに最下級段階から、生命をもった動植物や個々の組織体を観察することによって始まるわけである。

② [自己活動]

物理、化学のための教育方法上の注意を博物に有意味に適用することによって生徒に実験への準備、導入を行なうこととし、かつ又博物固有の観察、培養実験にもこれを役立てることとする。スケッチや模型の仕上げ、

動植物の同定，簡単な分類などは生徒の自己活動に任せ，この能力を高めることが必要である。第一年級では定期的に生徒に実習をさせることが欠かせない。

③ [分類学習]

各学年で視覚実例に基づいて種，属，科，目，綱，門の概念を学ばせるものとする。そうして生徒に，分類体系を学ぶことにのみ傾斜するのではなく体系化して学ぶという視点に親しませるものとする。葉，花，実の形，各種の花序については，これらが生命現象への理解，動植物の同定への理解を促すというかぎりでは詳論するものとする。形態学の授業を計画的に行なうことはしないものとする。

④ [発育]

最下級段階から生徒は生命有機体の発育も学んでいく必要がある。植物，両生類，数種の昆虫，カタツムリの発育観察をする場合，生徒は自分で植木鉢，水槽，飼育箱の観察を行なうものとする。

⑤ [重要教材]

教材を選択する場合，郷土の自然の姿，人間文化をはっきり示す動植物を入れるべきである。しかし，国外の陸海上に棲息する最重要の外国栽培植物，個性的動物を欠くわけにはいかない。また絶滅した動植物にも，時には言及する必要がある。

⑥ [国民経済との関係]

国民経済上の価値を有する動植物についての知識は，適切な事例に即して示すこと。

⑦ [健康教育]

健康増進にかかわる教育は，第二年級下級の，人間についての学習に限る必要はない。

⑧ [自然と人間]

博物ならびに他の自然科学諸科は、地学と分業して全自然現象の合法則的連関、自然法則への理解を深め、また人間と文化の自然とのつながりならびにそれらの生存法則への理解を深めるよう努力するものとする。

⑨ [進化学説]

進化学説を論議して生徒に研究仮説としての進化論の価値を分からせるものとする。一元論、二元論、宇宙機械説、活力説の問題についても生徒に教えるものとする。その際排他的一面的承認や否定的断定は避けなくてはならない。だが、これらに関して、教師が自分自身の立場を表明することを制限するものではない。

二 教育課題

(1) 第六年級 (2時間)

① 植物

植物の主要部——根、葉、花、実、種。冬芽、球根、球茎の発芽。胚種、子葉の役割、植物の光・空気・水・土壌との依存について。身の回りの最重要樹木。果樹と穀物種。重要な茸数種。自然ならびに人工の植物群落——草原、森、畑、山、公園。

② 人間

人間の体の主な部分とそのはたらき。

③ 動物

選出されたその土地固有の動物の体構造と生活様式——特に環境や人間との関係に注目して。最重要の家禽。本来親縁のグループ数種——猛獣、齧歯類、反芻動物。

④ 地質

身近な環境の最重要土質，鉾石。

（2）第五年級（2時間）

①植物

第六年級の教材の定着，拡大が目標である。重要な葉や花の形，花序——これらは身近な代表的植物に即して説明されるものとする。重要な野菜。草，シダ，苔，茸のいくつかを。近親種を比較して種，類概念を身につけること。

②動物

特に重要な外国種のいくつかを扱ったり，郷土の節足動物，軟体動物，芋虫の中から数種選んでこれを観察したり，あるいは系統立った基本概念のいくつか（種，類）を明らかにしたりしながら，第六年級の内容を深化させること。

③地質

水の地表形成作用。

（3）第四年級（2時間）

①植物

花，受粉，受精の仕組み。風媒花，虫媒花。特に典型的な植物の科の数種を選び比較観察して系統的概念，つまり科の概念を学びとらせること。

②動物

昆虫を構造と生活の仕方に基づいて選び出し，グループ分けすること。比較観察して目〔もく〕の概念を身につけさせること。自然の営み全体の中での昆虫の意義。昆虫の植物界との関係。

③地質

地表と人々の関係。

(4) 第三年級下級 (2 時間)

①植物

全植物グループの代表例を進化段階順に選び出しながら、系統という基本概念への視点を身につけさせること。植物の栄養と繁殖の仕方の各種を学ばせること。

②動物

下等動物(原生動物, 有刺胞類, 芋虫, 軟体動物)の代表例を進化段階順に選び出しながら、系統という基本概念への視点を身につけさせること。動物の栄養と繁殖の仕方の各種を学ばせること。

(5) 第三年級上級 (2 時間)

①植物

棘皮動物, 節足動物, 脊椎動物の代表例を進化段階順に選び出しながら系統という基本概念への視点を身につけさせること。

②地質

絶え間ない地表変化を想定させる諸々の根拠。地表を変化させる諸力——水, 空気, 地質構造過程, 火山現象。最重要岩石, 岩石構成鉱物。主要地層年代。

(6) 第二年級下級 (2 時間)

①生物

細胞と組織から成る動植物の体のあり方。単細胞生物。卵細胞からの多細胞体の発達。各門の代表動物を選び出して分類すること。人体の構成とはたらき。

（7）第二年級上級（化学と合わせて3時間）

有機体の環境との関係。動植物繁殖の諸条件。

（8）第一年級下級，第一年級上級（化学と合わせて3時間）

動植物の新陳代謝，運動，ささえる器官，刺激，繁殖について比較観察すること。地球の進化とその住人について概説すること。進化論の基礎。自然の中の人間の位置。生理心理学の一部を選んで教えること。

IV 音楽，図画，工作

1. 音楽

やがて出版される「男子高等学校音楽科学科課程」をドイツ高等学校、上構学校にも適用するものとする。

2. 図画

一 一般的教育目標

図画教育では、スケッチや絵画を、感動体験や自然な表現意志を形にするものとして、あるいはまた芸術、科学技術的目標のための説明手段、表現手段として奨励するものとする。文化科の全体教授と分業して、造形芸術とり分け郷土の記念芸術、記念建造物への理解を深めることが必要である。

二 教育課題

（1）第六年級～第四年級（各2時間）

自由製作——これは生徒が自分の印象や体験をスケッチしたり、絵画で表現するための場である。これと結合して、対象や印象を自由に描いたり切り抜いたりすること——この練習も大事である。スケッチ練習は黒板上でもなされるものとする。表面を色分けする練習。貼り絵練習。絵の具の使いはじめ。適当な機会に、すぐれた絵を観賞すること。

平面に描かれた比較的簡単な題材を測って描くこと。ジュッタリーン書体で書く練習。

(2) 第三年級下級～第二年級下級 (各2時間)

生徒の自由製作と関連して、題材に即し記憶に基づきながら空間表現の練習をさせること。遠近図法で描いたり、照明を利用して描く練習。この練習は黒板上でもなされるものとする。表面を色分けする練習。写生画、記憶画。貼り絵練習——切り抜き細工、リノリウム細工。簡単な装飾体練習。

簡単な物体、道具、建築部分を測り、様々な断面図、展開図に描くこと。スケッチ練習、絵画練習と関連して、美術作品の観賞は必要である。

(3) 第二年級上級～第一年級上級 (各2時間)

自然、絵画作品、郷土の記念芸術・記念建造物の研究。各種技法での自由製作。また装飾体でも行なうものとする。芸術作品研究と関連して生徒には造形芸術の基礎技術の指導、ならびに郷土の芸術がドイツおよびヨーロッパの芸術発展の中に占める位置の理解にかんする指導をしなくてはならない。

彩色の遠近画法、陰影画法の基本。道具、建物、建物部分の描写。地形見取り図の作成。

3. 工作、製図

一 一般的教育課題

工作活動は形あるものを作る手仕事とする。これは、生徒の精神、身体形成に寄与するのみならず、学校の欠乏にも応えるものである。特に教材の製作、修理によって（1921年4月9日の省令UⅢA 566／Iの意味において）

二 個別的教育課題

a. 木工，紙細工，金工，製図

（1）第六年級

授業は簡単な木工までとする。授業では生徒に、ごく簡単な道具で遊具、おもちゃ、ちょっとした実用品の製作をさせるものとする。目的物は裁断したり、鉋をかけた材木を使って製作させるものとする。生徒は授業の展開の中で、木の性質や道具について学ぶものとする。

（2）第五年級

簡単な木工の継続と幾分困難な作業課題。目的物の形はごく単純でなくてはならない。見取り図は直線，直角・鈍角，円・円弧を使うものに限定する。製図への最初の導入。材料と道具についての学習をさせるものとする。

（3）第四年級

授業は紙細工に入るものとする。授業では、生徒がちょっとした日用品を厚紙から作ったり、自作の紙飾り作品を作れるようにするものとする。ここでは慎重さと清潔さが特に育てられなくてはならない。作業は簡単な形に限定し、鋭角とか挟まった角は避けるものとする。進んだ生徒の場合、製本術に入ってよい。作業は簡単な製本に限るものとする。木や皮などの模造品を作業材料として使ってはならない。生徒には、最も簡単なや

り方で紙の製法，貼り絵材料の製造，手入れの仕方を教えなくてはならない。

(4) 第三年級

紙細工と製本術は引き続き行う。必要ならば，これらに代わり，鉋かけ作業を始めてもよい。鉋かけ仕事の授業では，日常使われる接合法（ほぞ工法，鳩尾継ぎなど）の伝統工法に従い，鋸，鉋を使って粗板から簡単な実用品を作る力を生徒に身につけさせるものとする。完成品をワックスがけしたり，塗装したりしてもよい。目的物はすべて生徒自身に，できるだけ簡単な形でデザインさせること。図面は実物大の大きさにデザインさせること。作業過程を通して生徒は，木の種類や分布，産出や加工，そしてこれに用立てられる道具についても学ぶものとする。

(5) 第三年級上級

授業は図面を使った鉋かけ作業とする。作業は第三年級下級の内容と対応する。課題が多少困難なことがあるかもしれないが，しかし個々の作業工程の大きさは一定の適切な分量を超えないものとする。木工作業に十分習熟した生徒がいたら，これの代わりに製本に進んでよい。

(6) 第二年級下級

授業は金工とする。そこでは，通常どの家庭でも行なっているもしくは教育目的にかなう針金・ブリキ作業を，生徒にできるようにさせるものとする。可能ならば対象を真鍮と銅のいくつかに広げてよい。生徒はこの作業過程を通して金属の生成と生産，組み立て技法と各種の特性，およびこれを利用した道具について学ぶこととする。

(7) 第二年級上級～第一年級上級

金工の授業は高温鍛造，旋盤作業も加えて今までのものを継続する。精密機械作業では，ガラス作業を取り入れて，生徒に学校で不足している物理，化学器具を作る力を育てるものとする。

b. 針仕事，デザイン

これについては，1908年8月18日の「リチェウム・高等女学校教則」が適用される。

4. 体育

体育については1901年の「ギムナジウム教則」が適用される。

第二部 上 構 学 校

〔一 序言〔目標および方法〕〕

1. 〔上構学校教材の考え方〕

ドイツ高等学校あるいは高等実科学学校——これらには原則としてギムナジウムと同一の教育目標が設定されているのだが——と同一の目標をもった上構学校〔6年制〕の教材選択をする場合、基本型学校〔9年制〕の教材を機械的に6年のものに切り詰めるようなことがあってはならない。上構学校がまさにしなければならないのは、概論的に一通りこなすということではなく、真に教育力ある教材を作業教育で取り扱いながら上構学校生徒の力を高めることだからである。その際、教材を系統的に展開することに心がけるものとする。

2. 〔教育方法上の留意点〕

生徒が多様な国民学校から来ていることを考慮して、上構学校では、国民学校で学んだ知識を尊重するものとする。しかし、知識を系統的に拡大させることを忘れてはならない。教材を拡大する場合、できるだけ基本型中等学校〔9年制〕に該当する課題と有機的に結合することが必要である。しかし、その土地の状況を特に考慮して選ばれた典型教材は、これに代わって優先されなければならない。その他の場合、原則的に、基本型中等学校〔9年制〕の当該学年の教育課題が上構学校にも適用されるものとする。その際、教材を若干入れ替えることがあってもよい。ドイツ高等学校用教則の中に盛られた諸提案を、高等実科学学校型上構学校に転用してもよい。しかしその際、ドイツ高等学校と高等実科学学校の教育目的の根本的相違点が混同されてはならない。

〔二 教育課題〕

そこで、上記の視点に則って立案される各校用学科課程は、さらに以下の点に留意することが必要である。

1. 宗教

宗教の授業では、キリスト教史の理解に不可欠な第六年級の教材を、第三年級下級の基本教材に簡約化して補うことでよい。なぜなら、第三年級下級の宗教で他の教材を扱うとなると、生徒の出身国民学校によっては重複する可能性があるからである。

2. ドイツ語

第三年級下級のドイツ語の授業では、文法教育のために——それは外国語のためにも必要であるが——主として国民学校の教材を深め、発展させることを中心課題とする。まず第一に、文章論は中等学校の特別な要求に合致するものでなくてはならない。音声学では、純粹の標準語を規則正しく練習すること。これは、ひょっとすると身についてしまったかもしれない不正確な言葉を正すために、くり返し行なうことが必要である。語源学では、語の生成と変化を歴史的に考察するという方向で国民学校の教育目標を継続発展させること。

3. 歴史

歴史の授業で何よりも留意しなくてはならないことは、ドイツの文化と歴史を、古代史の中から理解できるよう教材を適当なところに配置することである。特に第三年級下級では、この意味でローマ史にまで遡ることが必要である。

4. 地理、公民

「国民学校上級学科課程作成大綱」がドイツ高等学校の地理、公民の学科

課程の基本部分に対応するので、上構学校では、国民学校での教材配当を考慮してドイツ高等学校の学科課程を引き継げばよい。

5. 英語またはフランス語

上構学校の英語あるいはフランス語でも、目指す教育目標は、一般に基本型中等学校〔9年制〕と同一である。教材配分の際は、上構学校下級に基本型第三年級下級・上級のものを、上構学校中級に基本型第二年級下級・上級のものを、上構学校上級に基本型第一年級下級・上級のものを割り当てるようにすれば、基本的に十分である。しかし、通常は国民学校で学習した一般教養教材を使って基本型学校の下級、中級より早い進捗とし、第一外国語の場合、第二年級上級ですでに読物教材選集ならびに語彙学習を、ほぼ基本型学校の当該学年に定められた形で学習できることが望ましい。外国語教材は、最初から、生徒のすすんだ年齢段階に合わせる必要がある。上構学校で特に重要なことは、読物教材を計画的に選択して、教材短縮という止むを得ない状況の中でも、当該校種の一般的教育目標に何とかして到達することである。

6. 数学

国民学校出身生徒の多くに必要とされる十分でかつ多様な分数、小数計算の演算能力を養うため、算数の基本の四則計算を行なわせ、この段階で理解可能な既知数計算能力を高めること。著しく進んだ生徒の場合、この算数入門は一つの学習協同体にまとめてよい。

A. ドイツ高等学校型上構学校

この型の上構学校学科課程では、ドイツ高等学校の第四年級から第二年級の教育課題を、本校の第三年級下級から第二年級下級に配分することが必要である。その場合、第三年級下級では、ドイツ高等学校第四年級の計算学習を行なうものとする。

B. 高等実科学学校型上構学校

（1）第三年級下級（6時間）

①算数

算数，算術，幾何作図，計測——これらは，ドイツ高等学校型上構学校と同様である。

②幾何

幾何は，国民学校で習熟した単純な幾何図形の直観的学習と結びつけること。三角形，四角形の理論。特に平行四辺形と台形の理論。円の理論。

（2）第三年級上級（6時間）

①算数

未知数一個，未知数数個の一次方程式。およびこれの簡単な応用，特に実生活への。グラフ作成の初歩（経験関数，一次関数とこれを応用した方程式の解法）。正負整指数の冪乗。正負整数 n を用いた $y=x^n$ 関数。根の概念。根号計算。 $y=\sqrt[n]{x}$ の関数。数計算の応用練習，特に約分操作。

②幾何

面積計算と面積比較（ピタゴラスの定理）。線分の相同。相似理論。これらを円に適用すること。調和点，半径。相似状態，相似点。

③幾何作図，計測

実用設計，実用作図の継続的練習。方眼紙を用いての図形の面積計算。また，他のやり方あるいはまったく自由なやり方によるもの。算数と結合して曲線作図。図形や計算を組み入れること。線分，角，面積の正確な測定（ノギスの使用）。

（3）第二年級下級（5時間）

①算数

未知数一個の二次方程式。 $y=x^2+ax+b$ の関数。指数関数，対数関数。
対数表，計算尺。対数計算。

②幾何

円周と結合して曲線の作図。近似作図（円の分割，四分円）。簡単な立体を斜面から平行投射によって描くこと，また略図，見取図を描くこと。簡単な土地測量練習，水準測量練習。

(4) 第二年級上級 (5時間)

①算数

一次の等差数列，等比数列。複利計算，利子計算を経済生活からの応用で。正整数から複素数に至る数概念の確立。複素数の基本計算。ド・モアヴルの法則，二項方程式。有理整数関数とこれの導関数。極大，極小。変曲点 x ， $\cos x$ 。これらの導関数。

②幾何

空間での直線と面。立体求積の継続。測角器。三角形，四角形の求積の継続。

③幾何作図，計測

算数と結合して曲線作図。略図，見取図で空間立体を描くこと。土地測量，水準測量練習の継続。

(5) 第一年級下級，第一年級上級 (各5時間)

①算数

確率計算の基本概念。保健数学。方程式の理論，特に近似方程式。簡単な有理数分数関数とその導関数。二元二次方程式の簡単な解法。若干の超越関数とその導関数（三角関数，逆三角関数，対数関数，指数関数）。部分

曲線の研究。無限発散級数と無限収束級数。二項定理。冪級数の超越関数とその三角値、対数、 e 、 π 計算への応用。簡単な積分計算。これは円弧、表面積、体積計算への応用を行なうものとする。数概念、関数概念の拡大に配慮すること。

②幾何

球面三角。数理地学、数理天文学。直線、曲線の解析幾何。円筒、円錐による平面交線。円錐曲線の尖端限界との関係（ダンデリンの円錐）。円錐交線の合成幾何——尖端限界から展開する——。円錐交線の解析幾何。円の透視像としての円錐交線（パスカル・ブリアンソンの定理）。点の集合、放線束を投射して円錐交線の母関数との関係に触れること。

③幾何作図、計測

算数、幾何と結合して曲線作図。特に円錐交線の近似作図。球の表面部分の作図（地図学）。正面透視、斜面透視の基本概念。これの簡単な応用。数理地学、数理天文学による計測、計算。

これらについての歴史的、哲学的視点に触れるよう配慮すること。

7. 物理

A. ドイツ高等学校型上構学校

ドイツ高等学校型上構学校の場合、ドイツ高等学校の当該学年と同一内容とする。

B. 高等実科学学校型上構学校

〔（1）第三年級下級～第二年級下級〕

高等実科学学校型上構学校の場合、第三年級下級、第三年級上級、第二年級上級は、ドイツ高等学校の当該学年と同一内容とする。

(2) 第二年級上級～第一年級上級 (各 3 時間)

この場合もやはり、基本はドイツ高等学校の上級と同一の教育内容である。授業時間の大部分は、主として生徒の自由課題とし、一斉教授の中で説明されたものをもっと深く学習したり、かなり難しい分野を掘り下げて補足学習に充てるものとする。その分野はおおよそ次のものである——熱力学、気体運動力学、スペクトル分析、偏光と二重屈折、近年の放射現象、原子理論。

8. 化学

化学は、ドイツ高等学校と同一である。

9. 博物

(1) 第三年級下級 (2 時間)

①植物

開花植物についての考察の復習。特に、その生存条件と植物界での分類区分とに注目して。農林業で有用な植物。

②動物

脊椎動物、昆虫についての考察の復習。特に、その生存過程と動物界での分類区分とに注目して。動物飼育、狩猟、国民経済上の価値についても触れること。

③地質

水の地表形成作用。地表と生物との関係。

(2) 第三年級上級 (2 時間)

①植物

植物界の分類グループすべての代表例を，系統樹に沿って選び出し，系統という基本概念を学ばせること。

②動物

動物界の分類グループすべての代表例を，系統樹に沿って選び出し，系統という基本概念を学ばせること。

③地質

地表を変化させる諸力。主要地層年代。

（3）第二年級下級～第一年級上級

ドイツ高等学校の当該学年と同一である。

第三部 時 間 数

1. 基本型ドイツ高等学校〔9年制〕時間配当

	VI	V	IV	UⅢ	○Ⅲ	UⅡ	○Ⅱ	UⅠ	○Ⅰ
1 宗 教	3	2	2	2	2	2	2	2	2
2 ドイツ語	6	5	5	5	5	5	5	4	1
3 哲学概論	—	—	—	—	—	—	—	1	1
4 歴 史	—	2	3	3	3	2	4	3	3
5 公 民	—	—	—	—	—	1	—	1	1
6 地 理	2	2	2	2	2	2	2	2	2
7 数 学	4	4	4	4	4	4	4	4	4
8 自然科学	2	2	2	4	4	4	5	5	5
9 第一外国語 ⁽¹⁾	6	6	6	5	5	4(3)	4(3)	4(3)	4(3)
10 第二外国語 ⁽¹⁾	—	—	—	—	—	4(5)	3(4)	3(4)	3(4)
小 計	23	23	24	25	25	28	29	29	29
11 図 画	2	2	2	2	2	2	2	2	2
12 音 楽	2	2	2	2	2	2	2	2	2
13 体 育	3	3	3	3	3	3	3	3	3
合 計	30	30	31	32	32	35	36	36	36

自 由 選 択 科 目

図 画 工 作	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ドイツ科協同学習	—	—	—	—	—	—	2	2	2
自然科学協同学習	—	—	—	—	—	—	2	2	2
農 業， 園 芸	—	—	—	2	2	2	—	—	—

注(1) 英語を第一外国語に選んだとき，UⅡ，UⅢはカッコ内の時間数とする。

2. ドイツ高等学校型上構学校〔6年制〕時間配当

	UⅢ	○Ⅲ	UⅡ	○Ⅱ	UⅠ	○Ⅰ
1 宗 教	2	2	2	2	2	2
2 ドイツ語	5	5	5	5	4]	4]
3 哲学概論	—	—	—	—	1]	1]
4 歴 史	3	3	2]	4	3]	3]
5 公 民	—	—	1]	—	1]	1]
6 地 理	2	2	2	2	2 —	2 —
7 数 学	5	5	4	4	4	4
8 自然科学	4	4	4	5	5	5
9 第一外国語 ⁽²⁾	7 (6)	7 (6)	4 (3)	4 (3)	4 (3)	4 (3)
10 第二外国語 ⁽²⁾	—	—	4 (5)	4 (5)	3 (4)	3 (4)
小 計	28 (27)	28 (27)	28	29	29	29
11 図 画	2	2	2	2	2	2
12 音 楽	2	2	2	2	2	2
13 体 育	3	3	3	3	3	3
合 計	35 (34)	35 (34)	35	36	36	36

自由選択科目

音 楽（器 楽）	1	1	1	1	1	1
工 作，図 画	2	2	2	2	2	2
農 業，園 芸	2	2	2	—	—	—
ドイツ科協同学習	—	—	—	2	2	2
自然科学協同学習	—	—	—	2	2	2

注(2) 英語を第一外国語に選んだとき、UⅢから○Ⅱまではカッコ内の時間数とする。

3. 高等実科学校型上構学校 [6 年制] 時間配当

	U Ⅲ	O Ⅲ	U Ⅱ	O Ⅱ	U Ⅰ	O Ⅰ
1 宗 教	2	2	2	2	2	2
2 ドイツ語	4	4	4	4	4	4
3 歴 史	2	2	2	3	3	3
4 地 理	2	2	2	1	1	1
5 数 学	6	6	5	5	5	5
6 自 然 学	4	4	4	6	6	6
7 第一外国語 ⁽³⁾	7 (6)	7 (6)	4	4	4	4
8 第二外国語	—	—	6	4	4	4
小 計	27	27	29	29	29	29
9 図 画	2	2	2	2	2	2
10 唱 歌	2	2	2	2	2	2
11 体 育	3	3	3	3	3	3
合 計	34	34	36	36	36	36

自 由 選 択 科 目

ドイツ高等学校型上構学校と同一である。

注(3) 英語を第一外国語に選んだときは、カッコ内の時間数とする。

[訳者あとがき]

ここに訳出したのは、ドイツのワイマール時代プロイセンにおける高等学校の学科課程（『ドイツ高等学校・上構学校教則大綱』1924年）である。テキストは『プロイセン文部広報』第66巻第7号本文（実施省令）ならびに付録（教則大綱）に掲載された初版とした。

***Richtlinien für einen Lehrplan der Deutschen Oberschule
und der Aufbauschulen. 1924.***

***In: Zentralblatt für die gesamte Unterrichts-Verwaltung
in Preußen, Heft 7, Jahrgang 66, 1924.***

(Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1924)

この教則大綱は、当時のプロイセン文部参事官ハンス・リヒャート（Richert, Hans 1869–1940）の主導で作成されたものであり、彼の一連の中等教育改革「リヒャート改革」の眼目として創出された新しい中等学校「ドイツ高等学校」のための学科課程である。

ここにいう「ドイツ高等学校」とは、それまでのドイツの伝統的中等学校だった「ギムナジウム」「実科ギムナジウム」「高等実科学学校」に並ぶ第四のタイプの中等学校であり、その名に示すように「ドイツ文化」を教養の核とする教育機関だった。しかしこの学校についてはこれまで必ずしも十分に研究されてきたとはいいがたく、特にその教育内容のドイツ文化優位（「ドイツ的陶冶」）のため、「国家主義イデオロギーを準備した」ものとして過度に一面化されて評価されてきたくらいがある（Vgl. Dieter Margies: *Das höhere Schulwesen zwischen Reform und Restauration*. Neuburgweier/Karlsruhe, 1972）。

だが「ドイツ高等学校」は、これを就学者の状況から見ると、それまでギムナジウムへの門を閉ざされていた都市や農村の中産者子弟に中等教育への道ならびに大学進学機会（ここを修了すれば無条件に大学入学が可能）を切り開いたものとしてきわめて大きな役割をもつものであり、20世紀に世界的な潮流となる中等教育機会の拡大の嚆矢でもあったのである（1930年のヘッセンでの統計によれば、生徒の出身は宮農層32%、非熟練

工 25%, 吏員・店員 23%, 熟練工 15%, 官吏・自由業 4%, 年金生活者 1% であった。Vgl. Wolf/Roeder: „Die Aufbauschule. Sturukturwandel einer Schulform“. Berlin/Hannover/Darmstadt, 1964)。これにはドイツ高等学校に、国民学校修了生を受け入れる短縮 6 年制高等学校（上構学校）としての開設も認められていたという制度上の特徴を見落とすわけにはゆかない。

さらにまたドイツ高等学校では、その土地や学校のおかれている条件に応じた自由な教育を編成することを認めており、そのため 20 世紀初頭から世界的な広がりとなった教育革新運動＝「新教育運動」を、それまでこれに冷淡だった特権的中等教育機関においても展開させる条件となったのであった。

私は、ここ数年ワイマール時代ドイツ・ベルリンの新教育を調べる中で、このような意義をもつ「ドイツ高等学校」の教育原理的バックボーンとなっている本『教則大綱』の重要性に気付き、いつの日かその全貌を紹介してみたいと思っていた。かつてわが国でナチ時代の教則が翻訳されたことはあるが (*Erziehung und Unterricht in der Höheren Schule*. 1938. 邦訳『ドイツの高等学校』文部省教育調査部調査資料第 5 輯, 1941), 『ドイツ高等学校教則大綱』は私の見たかぎりでは訳出されていない。そこで、ここに盛られた教育編成の自由や作業教育原理、教材統合の考え方などを全体として知ることは、訳者の問題関心のみにとどまらない意味をもつものと考え、敢えて全文を訳出した次第である。忌憚のないご意見をお願いしたいと思う。

翻訳にあたっては原文に忠実に訳すことを心がけたが、一部、訳注をほどこしたり見出しの方式を改めたところがある（[] で表示）。そのほか、ニュアンスを伝えるために、言葉を補ったところがある。ゴシック体には下線を付した。

本教則大綱を入手するにあたってご配慮いただきました増井三夫氏に感謝いたします。

(注) ワイマール時代のプロイセン、男子の学校系統図は以下のようである。(伏見猛彌「独逸の教育」『岩波講座 教育科学』第一冊、岩波書店、1931年、参照。)

